四門会

第 4 号

聖マリアンナ医科大学
耳鼻咽喉科学教室同門会

四バイ会

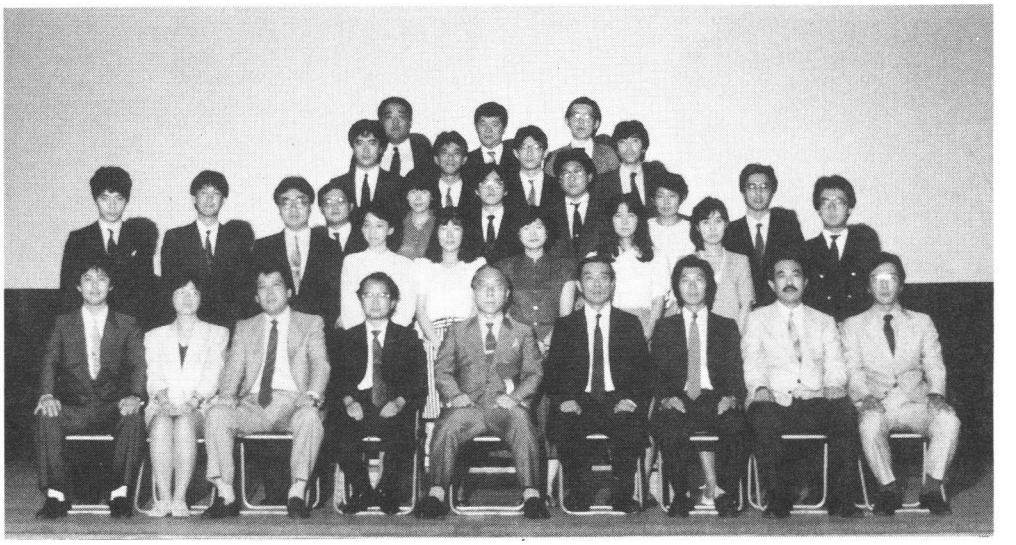
目次

特集「竹山教室を顧みて」

一、退職にあたって……竹山　勇……1
二、竹山教授と私の出会い……猪　初男……2
三、竹山教授と私……小野泰三郎……3
四、竹山勇教授退官記念誌に寄せて……石倉幹雄……6
五、竹山教室を顧みて……古野隆之……7
六、日当たりの良い医局……飯田　順……8
七、竹山教室を顧みて……大髙詳一郎……9
八、竹山教授退官に寄せて……山田善一……10
九、我が師・竹山勇教授……南　定……10
十、開業にあたり
　―竹山耳鼻科の一員として―……三保　仁……11
十一、「竹山教授との四年間」……楠　恵（旧姓松本）……12
十二、竹山先生に感謝……飯田典子（旧姓西村）……13

十三、竹山主任教授退職記念講演を拝聴して……田沢　卓……14
十四、「ご挨拶と思い出」……高橋　姿……15
十五、主任教授就任のご挨拶……加藤　功……16
新入局員紹介
一、五年ぶりの耳鼻科医局……芋川　英紀……17
二、聖マリアンナ医大の耳鼻咽喉科教室に入局して……菊地　仁……17
三、今までの私、これからの私……菱澤　えり子……18
四、一研修医の小さな抱負……新谷　敏晴……19
五、竹山教室に入局して……関　良武……19
国内外派遣報告
一、国内留学を経験して……鈴木　毅……20
二、近況報告……小松崎　靖……20
三、川崎市派遣・瀋陽市東洋医学研修紀行……岡田　智幸……21
学位授与者一覧……25
平成三・四・五年度業績集……28
外来担当表……56
医局構成員住所録……57
関連病院住所録……63
編集後記……65

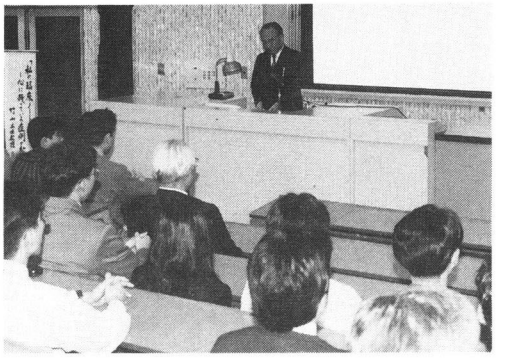
思い出の光景



第12回日本頭頸部腫瘍学会
（於：神奈川県民ホール，1988年7月6，7，8日）

第50回日本平衡神経科学会総会
（於：パシフィコ横浜，
1991年11月21，22日）

第55回耳鼻咽喉科臨床学会総会
（於：パシフィコ横浜,1993年7月8，9日）



竹山　勇主任教授退職記念講演風景
題目：私の臨床ノートより　―心に残っている症例の数々―
（於：本学本館３階臨床講堂）

竹山　勇主任教授退職講演後の小宴席にて
（於：本学別館８階職員食堂，1995年1月20日）

教室心得

先輩を敬い後輩を慈しみ
今日あることを感謝し共に助け
合い励まし合いて人の短を挙げず
己れの至らざるを求め病める人には
労りと優しさと慰めを与え互に
誠と友愛と礼節を保ち功を
労りと優しさと慰めを与え互に
誠と友愛と礼節を保ち功を
あせらず着実な努力と万全を期し
幅広い良医の育成に心掛け
医学の発展と地域福祉に
力を尽したい。

聖マリアンナ医科大学
耳鼻咽喉科学教室

特集

「竹山教室を顧みて」

退職にあたって

竹山　勇

「光陰矢の如し」の譬のように私が聖マリアンナ医大に赴任しました昭和五十一年から約十九年の歳月が経ち、本年三月末日をもって大学を去る日を迎えました。

当時は大学周辺には家屋もなく、現在のような賑いになるとは想像も出来ませんでした。教室員も私を含めて僅か四名に過ぎず、大変厳しい状況でした。赴任後、二〜三年間は学生の講義は殆んど一人で一年間を通して毎週行っており、外来診療も腫瘍外来、めまい外来も含めて週四回の受持ちでありました。新設の大学では何処でもそれなりの苦労があったと思いますが、とくに私立の単科大学というハンデは国試の成績にも現れるので、学内の国試対策にも意を傾け、耳鼻科の選択科目の時は幸いにも全国平均との僅差を維持し続け面目を保つことが叶いました。

医学部の目的は研究をはじめ、臨床面においても第一級を目指すことは勿論でありますが、それ以上に教育の重要性も含まれております。より良い人材の育成があってこそ、すぐれた研究、臨床が果されるものと信じております。世の中のすべての業種・業界においてもその組織に属する一人一人の人間性の良し悪しに懸っていることは論を俟ちません。

医学部の臨床系では人間を対象とした部門であり、とくに悩み、苦しみを持った方々に対するので医学生の根底には生来の資質に加えて相手に対する思い遣りや誠実さを心から実践できる情感を育ててゆかねばなりません。聖マリアンナ医大の創設者であられた故明石嘉門先生のご経歴をみますと神学校に学ばれており、その御卒業の直前に自分の進路について神父からの助言に感ずるものがあり、その後、医学に志され医師として人の為に役立つ道を選ばれたとあります。恐らく、先生の理念として本学が日本におけるクリスチャン・ドクターの養成を目指した医科大学であることを願っていたのではないかと推察されます。現今の日本では企業にしろ、医学の分野においても、国際性ないし国際的交流が叫ばれており、多くの日本人が欧米に渡り活躍していますが、欧米文化の原点を考えるとき、それは聖書に立脚した、長年に亘って培われた聖書を通しての信仰に裏付けられた教養と相俟って築かれております。その点、日本人はややもすると宗教あるいは信仰に乏しく己れの基盤や価値観が欧米人に比し、残念乍ら利己的（エゴイステック）であることは否めません。私共は幸いにも本学に籍を置ける立場に感謝し、聖書により親しく、より深く接しながら医療に、教育や研究に携わるべきでありましょう。

広い大海原をゆく船にしても大空を駆ける航空機にしろ、それぞれ羅針盤や計器を頼って運行していると同じ様に、人生という未知の旅においても、より良い旅行案内書や進むべき道しるべがあればどんなにか助かることでしょうか。しかも、人にとって、ただ一度

の人生の旅ですから、その思いは当然のことと思います。その道案内たるものは聖書であるといっても過言ではありません。事実、聖書が今もって世界のベストセラーであることは、その裏付けを物語っておりましょう。

私はこれまでの臨床四十年の間に、多くの経験を学ばさせて頂きましたが、その中において人知を越える不可思議な体験もあり、あるいは生命や体の仕組みを思うとき、その神秘性の存在に思いを至すことができます。

二十一世紀に向って、ますます医師の過剰を招くことでありましょう。患者さんが医師を選択する時代に突入している現今をみると、心からの愛（アガペ）の実践が伴った医師の育成が急務と考えられます。此の度、大学を去るにあたり、本教室の一人一人がしっかりとした信仰に裏付けられた生活信条を身につけて研究、教育、診療に躍進することを切望する次第です。

アガペこそ医に携わる心なり
悩める病人と共に歩みぬ

数々の人との出会い有り難く
心に謝して学舎を去る

茫々六十有余年
禍福哀歓幾変遷
人為不及天意妙
生死合離渾神縁

茫々たり六十有余年
禍福と哀歓幾変遷か
人為は及ばず天意の妙に
生死合離は渾て神縁なり

竹山勇教授と私の出会い

猪　初　男

竹山勇教授は昭和三十年三月新潟大学医学部卒業後国立東京第二病院で、インターンとして一年間研修を積んだが、当時私は耳鼻咽喉科医長として全国の各大学から集まった若い希望に燃える青年医師達を指導する立場にあった。竹山教授（以下失礼ながら竹山君と呼ばせていただく）は後輩にあたるので、ひそかに各科医長に訊ねたところ彼はなかなか優秀で、積極性もあり将来期待し得る人物であるとの評価であった。私はこのときはじめて竹山君に出会ったのであるが、多くの人々の評判通りよく勉強し、意慾に溢れ、若々しい活力に充ちた態度はきわだっていた。インターン生活で竹山君は全国から集まった多くの優秀な人材と出会い己を知り人を識り、いろいろの影響を受けたものと考えられる。

その後竹山君とは新潟大学医学部耳鼻咽喉科教室に入局し研鑽を積んだのち、再び国立東二病院の耳鼻科に入局し、専門医としてのきびしい研鑽をつづけることになった。当時国立東二病院の耳鼻科医局には常に十名近い若い医師が集まり、よく遊びよく学べをモットーに活気に溢れていたが小野泰三郎講師もそのうちの一人であった。

竹山君は期待を裏切ることなくよく勉強し数多くの臨床例に取り組むと共に、研究にも意欲を注ぎ、研究施設も機械、器具も殆ど無い環境下にありながら創意工夫をこらし、実験用器具を手づくりでつくるなどしながら立派な学位論文を書き上げた。

国立東二病院耳鼻科の当時の雰囲気は最高で、よく遊びよく学べをモットーに活気に溢れ、数多くの論文を発表すると共に学会活動も盛んで、多くの人が学位論文を書き上げ博士号を取得した。

その後竹山君は済生会中央病院を経て、静岡赤十字病院の耳鼻咽喉科医長となり更に研

鑽と経験を積み、学問的にも人間的にも成長し、指導者として備えるべきものを次第にみにつけていったものと思われる。

聖マリアンナ医大の教授候補に竹山君があがっていたが、数多くの優秀な候補者の中にあって、竹山君は学問的にも人間的にも申し分ないが残念ながら大学の講師、助教授といった教職歴がないことが問題であるとの意見もあったとのことであるが、すべての條件をクリアして教授に決定したとの報告をうけ新潟でひとり祝盃をあげたのは遂先日のように思われる。私は国立東二病院の医長から新潟大学の耳鼻咽喉科教授となり既に新潟大学に赴任していた。

竹山君の教授就任は昭和五十一年五月であるが希望に燃え新しい教室づくりに着手した竹山教授に新潟大学として、できる限りの協力を惜しまない積もりであったが実際はごく少数の教室員を出すだけで竹山教授の期待に沿うことができなかったことを申し訳なく思っている。

当時山形大学、富山医科薬科大学にも人材を出さなければならず新潟大学として最もきびしい状況であったをご理解願いたい。

その後マリアンナ医大出身者の入局者が増えると共に他大学出身者も入局し教室は着実に充実・発展していった。私はいつも学会発表や学術雑誌への投稿論文に注意を払っていたが、竹山教室から数多くのすぐれた学会発表や論文が出ていることを知り大変うれしく思った次第である。

その後研究は次第に多方面にわたると共に奥深いものとなり、学会をリードする立場になったことは、まことにうれしい限りである。

加藤功教授、大橋徹教授が加わり研究、診療、教育面で一段と教室が強化され磐石の態勢となったことは周知の通りである。竹山教室はまさに完成されたものとなった。

現教室における診療、研究、教育の実態については多くの方々が記述されるであろう。

私は新潟大学医学部教授から新潟大学長となり六年間学長をつとめ昭和六十年十月新潟大学長を退官し東京に居を移し悠々自適の生活を送っていたところ竹山教授から声がかかり、ぼんやりしていないで時々教室に顔を出し少し手伝いをしてくれとの好意的な提案をうけた。翌年四月から客員教授ということで時々教室に顔を出していたが次第に大学の雰囲気に馴れると共に何かお役に立つことはないかと考え、長年にわたる私自身の経験をもとに「私の医学概論」ともいうべきものをやってみたいと考えた。

医進課程の学生に対する医学概論の講義もさることながら医学部五年生のＢＳＬで、小人数の学生を相手に「医師たるものは如何にあるべきか」について学生諸君と話し合うことはまことに楽しいものであった。

心あたたかい常識人としての医師、患者から真に信頼される医師になるためには常に謙虚であらねばならぬことなど私自身の経験に基づいて話をすることが常であったが、若い学生諸君に何等かの反応をみるときは非常にうれしく思ったものである。

竹山教授が「教室心得」として教室員の心得るべきことを書いた額が教授室に掲げてあるが、竹山教授が学問・技術ばかりでなく「医の心」を説き、人間としてかくあるべきことを述べ、良医の育成を目指していることを知り我が意を得たりと喜んでいるが、竹山教室出身者が第一線の医療現場で患者さんから真に信頼される良医となって活躍されることを念願するものである。

竹山教授は教授としての重い任務を果たし、数多くの学問的業績をあげ、自らは日耳鼻総会において二回も特別講演を行うと共に、全

国的規模の大きな学会を数多く担当し日本耳鼻咽喉科学会のために貢献されたが将来とも聖マリアンナ医大耳鼻咽喉科教室のためにお骨折りを願う次第である。

教授にとっていつまでも忘れることができないものは、教室員と共に過ごした日々の営み、すなわち外来・病室の診療活動、手術や抄読会、研究会、学会発表や医局旅行、忘年会その他様々の飲み会などを通じて、それぞれの時代の教室員と心を通わせ同志として共通の目的に向かって切磋琢磨した事実である。

この憶い出は教授たる者にとって最も価値ある宝物というべきものであって、いつまでも忘れることのできないものであります。竹山教授が今後とも充実した日々を過ごされるよう心から念願すると共にあらためて今日までの永年にわたるご努力に対して心から敬意を表する次第です。

竹山教授と私

小野　泰三郎

平成六年六月、竹山教授は六十五歳の誕生日を迎えられた。学内規定により同七年三月をもって聖マリアンナ医科大学を定年退職される予定である。

竹山先生は昭和五十一年五月の教授就任以来十八年十ケ月の長期にわたり、大学および医局の発展と学会への貢献に才腕を揮われた。十名足らずの医局を今日の五十名にあまる大きな医局に育てあげ、その間に地域医療や病院勤務医として自立して行った英才も数多く、また会長として主催された大きな総会も三つにあまる。このことは教授の統率力と研究、教育に絶えざる努力を惜しまれなかった成果であると言わねばなるまい。

人はだれしも育ちや職業からくる得手不得手、長所短所があり、そうした人となりがその人のもち味となり、また人物評価の一端ともなっている。竹山教授はどうだったろう。

竹山教授が聖マリアンナ医大に就任された当初、私がもっとも危惧したのは教授の任期が短かいのではないかということと、教授の個性のありようであった。

教授の就任初期に、私はしばしば教授と話し合った。

「竹さん、マリアンナは腰かけで、今回の就任は、さらに有力な大学に就任するためのワンステップじゃないのかな？」と、いうのが私の質問の内容だった。これに対して

「よく、そう言われる。だけど、僕はここから動かない。定年までやめるつもりはないですよ。ここで医局員を育て、ここに骨をうずめるつもりだ。家もそのためにつくったし、生活のすべてを、このことをベースとしてつくり上げている。その点は安心してくださいよ」と、いう教授のことばを何度か耳にしていた。

私が聖マリアンナ医大に就任したのは、当時、静岡の赤十字病院におられた教授の推薦によるものであったが、就任してからの私はこの大学にひかれるところが多く、あたかもこの大学が私の母校のような気がしていた。しかし年とともに卒業生を一年でも早く教壇に立たせたいという念願もあった。そのための教育に情熱をもち、力強い指導者が欲しかった矢先に教授を迎えたのである。

この大学はすでに二、三の既成の大学による学内派閥があった。新任の教授とそれらの派閥との関連の有無は、教授の立場に微妙に

影響するだろう。耳鼻咽喉科教室はそれらの派閥とは無関係な存在にあった。

竹山教授には独特の個性があった。やや古風と思われる個性が他の教授や学生諸氏にどの程度うけ入れられるだろうかということも私の懸念にあった。しかしながらいまだ微力な教室を育てあげるには多少の個性の強さもあっていいのではないか、そつのない八方美人ということだけでは、この教室の発展は遅れるのではないか、という考えも当時の私にはあったのである。古風ともいえる人間像と近代医学の取り組みで、自らの教室づくりに専念するのも一つの行きかたかもしれぬと考えていた私は、教授と幾度も話し合った。教授はこうした私の意見に耳を傾け、また教授としての考えも話されていた。大筋において意見の一致を得た教授は迷うことなく日夜、教育に臨床に励まれ、医局としての研究課題にもとり組まれて行かれた。ときには医局内で個性と個性のぶつかり合いもあったようだが、すべての点において問題のない世帯は存在しない。人が多くなればなるほど意見も多くなるのは当然の話である。私も教授と医局員とのパイプ役として、できるだけ努力をしたいものと、何度か教授と話し合うことがあった。

やがて教授が大学にも慣れ、仕事も軌道に乗り、医局員も大幅に増加したころ、私は自分をかえりみて、身の引きどきではないかと考えてみた。

私は、七、八ケ月大学を休み、全く顔を出さなかった。大学は休んだが、耳鼻咽喉科教室のことは念頭から離れなかった。

そうしたある日、大竹、飯田の両先生に呼出された私は、二人の先生から教授の意向と希望を何時間かにわたって聞かされた。

「貴方がたの言われることは大体わかったが、今日の話は教授が直接私に話されればいいことで、それを何故、貴方がたがわざわざ私に伝えてくるのかな？」

と、いう私の問いかけに、二人の先生は

「直接には言いにくいこともあったのでしょう。私たちからうまく話してほしいという教授の意向でした。と、いっても、われわれもうまくは喋れませんが…」と、いうことだった。

私にしてみれば、二人の先生を困らせるのがその日の会合の目的ではなかったから、話は一応聞きとどけた、ということにしてその日は別れた。

休む前からすでに非常勤であった私に、教授は常勤としての積極的な助力を望まれ、好意的な条件も出されていた。医局員の増加にともない、教授の女房役として私を受け入れたいのが教授の強い希望であった。

だが私にはプライベートな仕事もあり、大学勤務には限界があった。その結果、教授の希望されるところと私の実際とは一致しなかった。そうして私は身を引くことを考えていたのである。ところがわれわれ二人の間には、常識的な友人として済まされないなにかがあった。互いに意識していることでもなく、また工作していることでもなかった。それは気付かぬうちに二人の心の内に自然に醸し出された心情ともいえるものであった。

二人の先生との話し合いからしばらくして私は大学に出むいたが、私を迎えた教授の笑顔は私の思惑以上のものであった。私はふたたび大学にもどり、非常勤ながら私の勉強のためにも講義の一端を担うこととなった。

どのように親しい友人の間でも、ときには感情の齟齬が生ずることがある。このような場合には相手の欠点や弱点を静かにうけ流すことである。とくに相手の弱点へのこだわりは、相手を逃げ場のない窮地へ追いこむことになり、逆にわが身の思わぬ破綻をまねくことすらあるものだ。先づはお互いに相手の長

所を見出し、より大きな「愛」ということを真剣に考えることである。また、どのように親しい友人でも淡々とした接触が友人関係を持続させてくれるだろう。ついでながら派手なこと、大きなことを言う人はたしかに目新しく、面白くも感ずるが真実性に乏しく、誠意に欠けるところがある。このような人とは、いずれ疎遠になるだろう。

教授は昭和四年、私は二年生まれで、ともに国立東京第二病院で耳鼻咽喉科を学んだ。そのころから教授は他の医局員とちがった地道なところがあった。KO色の極度に濃厚なこの病院においては、医局内においても話によっては人を選ぶ必要があった。KO出身でない竹山先生と私は、そのような事情から言わず語らずのうちに接触が多くなっていった。東二病院時代のメンバーとして先輩であった私の協力者は、竹山先生以外に考えられなかったのである。それだけに何となく気の合う人だとは思っていたが、これほど長く、四捨五入すれば四十年の長きにわたって付き合っている医者は、私には教授のほかにはいない。ときにはわがままを言ったり、困らせ合って、教授も定年という年齢になられた。それだけ私も年齢をとったわけだが、それでも互いに人間としては成長のほんの一部を支え合っていたに過ぎないのかもしれない。

定年退職されたからといって、これで付き合いが終わるわけではないだろうが、大学で会うことは今までよりはるかに少なくなるだろう。遠慮なく物が言える人がいなくなると思うと、いささかの寂しさはのこる。

四十年ちかい付き合いで、後半は同じ大学の同じ医局にいながら、教授「竹さん」を百パーセント私の好みにつくりあげることはできなかったし、教授も同じようなことを考えられておられるだろう。だがどこかに、何かが残っている。二人ともそう考えていると思う。

竹山先生、今後は持てる力の七十パーセントを使って第二、第三の人生をたのしんでください。

竹山勇教授退官記念誌に寄せて

石倉幹雄

平成七年三月聖マリアンナ大学耳鼻咽喉科学教室竹山勇教授は大学の規約により、退官されることになりました。大学教室の進歩につくされた先生の御努力、功績には測り知れぬものがあります。大学創設の頃から御一緒させて頂いた一人として、そのことを思うと感無量であり、月日の流れの早さに驚くばかりでございます。当時をふり返れば、なつかしいこと、旧友の顔等も思い出されて、とても一言でお話し尽くすわけには参りません。又先生との間で生まれた数多くの出来事、教えて頂いた事等順序良くお話しすることも到底不可能ですが、今手元の資料を見ながら思いつくままに書いてみます。教室の手術や外来のことはさておくとしまして、私は御一緒させて頂いた学会旅行、ボルドーと秋田の鼻科学会のことを書いてみます。一九八〇年フランスのボルドー大学耳鼻咽喉科開講百周年を記念して学会があり、慶応の斎藤教授等と、出席させて頂きました。当時教室に居られた沖花先生もアメリカから駆けつけ竹山先生と三人でホテルの一室に泊まり学会へ出掛けてい

ました。ボルドー大学は御承知の如く、初代は喉頭癌のムール徴候で有名なムール教授次がメニエール手術で知られるJ.ポルトマン教授、それからデスポンス教授を経て、M.ポルトマン教授が主任であった時代です。J.ポルトマン御夫妻も健在で、いろいろのお話をして頂きました。これだけでも一つの文になりますので機会を見て書こうと思います。ある日、竹山先生とポルトマン教授の住まれていた“A bbaye de Bonlieu”という邸宅に招待されたことがありました。ここは一一五二年創建されたもとは修道院で、スペイン国王も従者と逗留した由緒のある建物でSaint Jacque de Compostelle通りにあり、昔は三十乃至四十名の僧達も暮らしていたそうで、書斎も立派で大きなペチカの前で竹山先生と外国の教授達と談笑したことはイベントといえるものと記憶しています。学会の後は、スペインへ廻り、マドリッドのプラド美術館に参りました。私は予備知識もなく、先生からゴッホやゴヤ、ヴェラスケスの絵画を教えて頂き、帰国してから資料を集めて勉強しました。マドリッドからトレドまで行きましたがその時タクシーを勧められましたが先生が外国へ行ったら自分の足で歩く方が頭に入ると仰しゃるので汽車の切符を買いトレドへ行ったことを憶えています。勉強の方法もこのように教えて頂いて今もそれを実行しようと心掛けております。

秋田市の鼻科学会には十一月七日に開かれていました。鼻アレルギーの演題を出させて頂き、発表の終わった後、先生に平野美術館へ案内して頂きました。そこには、藤田、ルーベンス、レンブラント、ピカソ、マネ、ドラクロワ等約六百点の画が展示されゴヤのエッチングも見ることが出来ました。それからは斗牛のスケッチを含む多くの素描もあり、この美術館は一九六七年五月に設立されたということでした。私は秋田市はこの時が始めてでしたから、先生にいろいろ教えて頂きました。市の中央にはあさひ川が流れていて、県庁や裁判所NHKのビルのあるところに花時計があり、その前の堀には千葉の検見川から昭和二十六年に発掘された縄文時代の種から発芽したという大賀ハスがたくさんの花を咲かせ、その間を何羽かの白鳥が遊泳していたのを想い出します。竹山先生には医学ばかりでなく、美術、動植物、歴史にも大変造詣が深くいらっしゃり御一緒させて頂いたお影で私も少しづつ関心を持つようになり私の人生に深みを増したように思われます。今後も一層お元気に御活躍下さるようお願いします。

竹山教室を顧みて

古野隆之

竹山教授の退官にあたり、今日まで先生の御苦労に謝意を申し上げると共に竹山教室の思い出を少しばかり述べさせていただきたいと思います。

私が竹山教室に入局したのは先生が柔道部の顧問をしていたことがそもそものきっかけで、何も考えることなく自然に耳鼻咽喉科を選びました。私の入局時は教室員も少なく、研修医の仕事は外来、病棟、手術に検査をやることが一杯で、初めのうちは教室員の多い内科あたりにするべきだったと反省もしたものですが、それはそれで、家族的な雰囲気があ

り、師弟の関係はありましたが分からないことは気軽に質問でき、丁寧に指導していただきました。また、喉頭全摘、頚部郭清術など長時間の手術ついたあとには、教授室で先生と冷えたビールを飲みながら遅くまで色々な話を聞かせて頂き、翌日からの励みとしたものです。仕事にも慣れ、教室も充実してくると、私も川口の済生病院、町田市民病院と関連病院に派遣されましたが医局会で教室に戻るたび関連病院での診療、様々な出来事を親身になって聞いてもらうこともしばしばでした。そして、春秋のゴルフコンペ、法師温泉をはじめとする医局旅行などはまさに家族旅行の感さえありました。勉強の嫌いだった私にとって、これらの懐かしく楽しい思い出こそ、竹山教室心得のなかにある「和をもって医の心を学ぶ」ことの実践のように思えます。竹山先生の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

日当たりの良い医局

飯田　順

耳鼻科を退局し、開業してそろそろ三年になる。大学に勤めていた頃を振り返ってみると、やめる直前の頃よりも、自分が下っ端であった十五年程前の頃の方が懐かしく思い出される。

今でこそ、五十名近くの医局員が在籍しているが、私が入局した頃は大学の歴史もまだ浅く、十数名のこじんまりした医局であった。

当時の医局に所属していた先輩の先生方は、それぞれユニークな個性の持ち主であったが、中でも比較的年齢が近く、直接接することの多かったO先生、T先生の両先生はとりわけ印象に残っている。

まずはO先生。物事を損得勘定でとらえない、おおらかな性格の持ち主である。また好奇心旺盛で、非常に多彩な趣味の持ち主でもある。私の知るかぎりでも絵画、フルート、パソコン、囲碁、山歩き、料理、オートバイなどがある。しばらくぶりに会うと、また新たな趣味が加わっているのである。

O先生は仕事の面では腫瘍を担当していた。ある夜こんなことがあった。私が当直をしていたときに、患者さんが口腔から出血しているということで、起こされた。

その人は舌癌の術後再発の方で、診察すると再発した腫瘍から出血していた。どうやって止血したものか考えた挙句、出血部位を結紮することにした。

ところが腫瘍は脆く、悪戦苦闘したが思うように糸がかけられず、ますます出血の勢いが増してきた。自分独りではどうにもならず、主治医のO先生を呼んでもらった。

先生は夜中の呼出しにもかかわらず、嫌な顔はせず私の経過報告を聞くと、慌てず騒がずおもむろにガーゼを手に持ち、それを出血部に当て、黙って十分程圧迫した。そしてガーゼをそっとはがすと、出血は嘘の様に止まっていた。彼は「それじゃー」という言葉を残して平然と帰っていった。

自分の未熟さに恥じ入るとともに、そのとき程、O先生がカッコ良く見えたことは無かった。普段は冗談ばかり言っているが、やるときはやるのである。それ以来、私は出血に対しては圧迫だという教訓を身をもって知ったのである。今でも鼻血が出た子供を連れて

きた母親には、「圧迫が一番」と力を込めて説明している。

そしてT先生。合理主義の人である。クルマの安全性が今ほど、叫ばれていない当時から、彼は愛車に乗る際には、自分はもちろんのこと、同乗車にも必ずシートベルトの着用を勧めていた。というよりはシートベルトを使用しないと、彼のクルマには乗せてもらえなかったのである。

また運転中は、ヘルメットをかぶっていた。おまじないで、ヘルメットを車内に置く人はたまに見掛けるが、レース場でもないのに実際に使用している人は見たことが無い。

しかし現在では国産車から、安全性の高さではよく知られる某輸入車に乗り換えたためか、頭は無防備にされている。当然エアーバッグは備わっているのであろう。

当時の耳鼻科の医局は、現在の位置からいうと、廊下を隔てた反対側にあった。今は助手室として使われているあの部屋である。その頃の医局の様子を頭に思い描くと、T先生が窓際に椅子を持ち出して日向ぼっこをしている姿が浮かんでくる。T先生は土曜の診療が終ったあとなどに、椅子の上であぐらをかきながら、陽差しを浴び一週間の仕事の疲れを癒していた。

T先生は非常に勉強家であり、普段から夜遅くまで残って勉強していた。医局員の多くは仕事に疲れると、コーヒーを飲む者が多かったが、T先生は健康を考慮して、こぶ茶を愛飲されていた。見た目よりも、実質を重んじるのである。

またO先生とT先生は、一方は大胆、大ざっぱ、他方は繊細、緻密と対照的である。二人は仲が良いのか悪いのか分からないが、丁丁発止とやりあう言葉の応酬は、宴会の席の大きな楽しみの一つであった。文章表現力の乏しさのため、ここにその様子を再現できないのがもどかしい。

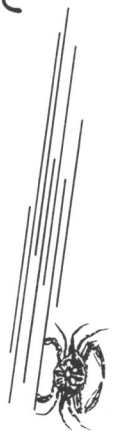
このようにユーモアあふれる諸先輩に囲まれ、私は研修医時代を伸び伸びと過ごすことができた。

寂しいことであるが、現在の医局には、私が入局した当時在籍されていた先生はO先生、T先生を含めて、ほとんど誰もいない。そして最後のひとりである竹山教授もあと数カ月で退官される。

今使われている医局の日当たりは、以前の部屋に比べやや悪いようであるが、昔のようにその雰囲気だけは、いつまでも暖かく人を迎えてくれるようなものであって欲しいと願っている。

竹山教室を顧みて

大髙　詳一郎



私が竹山教授のもとに入局させていただき五年間のご指導を得て、今日、秋田の辺地にあって医師としてまがりなりにも生業ができることは先生より教えいただいた耳鼻科医としての知識はもちろんでありますが、先生の診療の姿、竹山教室の諸先輩方から学ぶことができた礼節をもって一歩ずつ地道に診療にあたることのように思えます。学生の頃、耳鼻科の実習は恐怖でした。私のような不出来な学生には先生との口頭試問はただただ辛いもので、手抜きしたところには厳しく叱咤、質問されたものです。しかし、研修医として入

局したカンファランスでは指導、助言はいただいても私の不勉強については言及しませんでした。しばらくの間、私はこのギャップに戸惑いながらも、未熟な若輩者でも一人の医師として認め、自覚を促している先生の暖かい気持ちが分かりました。また、先生の外来についた時、患者の訴えをカルテが一杯になるほど（読もうとする研修医には大変）よく聞き、丁寧な言葉でしかし諂うことなく話し掛け診療時間をオーバーしながら治療にあたる姿に医師としての患者にたいする礼儀を教えられました。教室では先生の研究テーマのひとつであるヒトパピローマウィルスの研究が漆畑先生、堤先生たちと共に行われていましたが、検体からの抽出など時間をかけた地道な作業を私はただただ感心して傍観するばかりでした。過日、全国紙にこの研究が紹介され地道な努力が結実したことを知り嬉しく思います。

竹山教室を出させていただいて六年、当地秋田の言葉にもだいぶ慣れてきましたが患者の訴えがよく分からずイライラすることもよくありますが、教室時代を思い出し、腹を立てず、自分の守備範囲でコツコツと礼節を忘れず診療にあたろうとするこのごろです。医者の道にも僥倖はないようです。

最後になりましたが、竹山先生、長い間、聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科主任教授として私をはじめ多くの教室員をご指導くださいましてありがとうございました。大学は去られますが先生にとってはひとつのことを成し遂げた爽やかな満足感があることと思います。先生の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

雪囲い　解きて今宵の月あかり
窓にさしいる春となりけり

百穂

竹山教授退官記念に寄せて

山田善一

このたび、六十五才で定年退官を迎えられました竹山教授に、心より祝福の言葉を述べさせていただきます。

長い間ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

竹山教授が聖マリアンナ医科大学を去られると思いますと、残される医局員をはじめ、私も含めた現在全国で御活躍中の竹山門下生の諸先生方は、大きな支柱をなくした心細さを感じざるを得ません。

竹山教授は私どもにとって名実ともに、カリスマ性をいだいた名リーダーでした。

竹山教授は教室の教育方針を一早く確立しました。それは早くから専門的な分野にのみ偏ったりせず、先ずgeneralな耳鼻科医を育てることを第一の目標とし、単に手術だけでなく、診断、治療から社会復帰までを考えることができるような耳鼻科医を養成することでした。

学生時代から教授室におじゃまし将来何科の道を進もうか悩んでいた時、これからの耳鼻科医の重要性、発展性をとかれ、また、現在でも一般の人に思われがちな耳鼻科医のマイナー性を否定し、また、竹山教授の人間性にほれ込んで入局を決断しました。

大学の医学部で教授を務めるということは、対象がひとの生命だけに、ごまかしや、かけひきや、やりなおしなどが通用しない面があ

り、また学内学外において厳しい立場に立たされ相当のストレスの日々だったと御想像いたします。

どうぞ、これからは御健康に留意なさって、大学を去られてからも後進の御指導に精を出されることをお祈りいたします。

長い間ほんとうにご苦労さまでした。

我が師・竹山勇教授

南　定

聖マリアンナ医科大学に入学し、柔道部に入部した。その時に顧問だったのが、竹山先生で、それから長いお付き合いが始まった。

一－三年までは、柔道部のコンパでお会いする程度で、ほとんどお話したこともなかった。四年に柔道部のキャプテンとなり教授室を訪ねる機会が急に増えた。しかし、学生の間では、「鬼の竹山」と呼ばれており、とても近寄り難い存在であった。わたしの学生時代、何度怒鳴られた事か。その時は内心、「なぜ、おれがこんなに怒鳴られなければいけないんだ」と思っていたが、後で冷静に考えると、「なるほど怒鳴られて当然のことをしていたな」と納得できることばかりだった。おかげ様で、その年の夏期東日本医科リーグ大会で団体優勝を成し遂げることができた。

それからしばらくは、平穏な日々がしばらく続いた。そして、国家試験も合格し、いざ入局する科を決定しなければならなかった時、自分自身では、一般外科か、耳鼻科かで迷っていた。しかし、いつの間にか耳鼻科でお世話になることとなっていた。

そして、入局後は、患者さんへの接し方から手術方法まで、手とり足とり御教授していただいた。

ここで、長年、竹山先生と接してきて一番感じたことについて述べたいと思う。それは、竹山先生は『子供のような人だ』ということだ。とても純粋な心を持っていらっしゃる反面、一度へそをまげると大変である。しかし、それもこちらが素直な気持で、面と向かって腹を割って話しをすれば、ちゃんと理解していただける。竹山先生が直球を投げて来たら、こちらも直球で返さなければいけない。へたな小細工は、御法度である。そして、もう一つ感じることは、けっこう『寂しがりや』だということだ。やはり、人の上に立つ以上、恐い存在でなければいけない。そうすると周囲の人間は一歩さがってお付き合いするようになる。医局員も教授相手だと、一歩下がってしまって素直に気持をぶつけられない。そこでなんとか歩み寄ればよいのだが、頑固おやじな面もあり、難しい問題だ。そして、その溝はいつの間にか広がって行く。

竹山先生もその辺うまく立ち振る舞えばよいのに、その小細工ができない。

なんだかんだ言っても、竹山先生には大変お世話になった。この場をお借りしてお礼を申し上げます。「本当にありがとうございました」また、「これからもよろしくお願い申し上げます」。

開業にあたり
―竹山耳鼻科の一員として―

三保　仁

私が竹山耳鼻科に入局して若干六年が経ち、やっと耳鼻科医としての何たるかをこれから学ぶべき年次に達した所であるが、両親の新住居建設を契機に歯科医である姉夫婦がそこに開業をすることになり、また、現在小児科医として既に開業している母と共に、一族が一つ屋根のしたで開業することが父の長い間の夢であったため、私も未熟ながら時期を同じくして開業をする運びとなった。運命のいたずらか、私の恩師であらせられる竹山主任教授が丁度御退官される時期と重なることに相成った。

いざ開業の準備に取り掛かると、設計、導入機材、保健所の問題、スタッフ、資金面など多くの手間がかかる事項が山積したが、それらの準備段階を進めるうちに、開業計画の時点で、あらかじめある程度の治療方針を決めていなくてはならないことを痛感した。それはすなわち、今後の自分の臨床医としての姿勢を再認識することでもある。大学病院においては、教育、研究、臨床の三本柱のいずれにおいても満足な活動ができなかった自分であるが、医業を志し、社会に少しでも貢献することができればと歩み始めたこの道であるから、是非この目標を達成したい一心であるが、いかんせんまだ若輩者であるがゆえに多くの不安が付きまとうのが事実である。

しかし、竹山教授は三本柱のいずれにおいても輝かしき業績をおもちになり、そのいずれの面においても細部に至るまで常々ご教示下さり、私の耳鼻科医としての礎を授けて下さったわけであるが、今回開業を目前にして、多くのお言葉が思い起こされる今日この頃である。例えば、患者の立場に立った医療を、外来で手間を惜しむな、等々、言われてもっともなことばかりであるはずなのだが、自分で実行することができていたかどうかは疑問が残る。特に教授は臨床面において力を入れておられ、現在においても手術、外来など現役として何れも第一線でご活躍されておられる。このようなことは他の教授方々には聞いた事はなく、「臨床家、竹山教授」と言われるゆえんである。その姿勢が我々医局員にとって、すばらしきお手本となり、また目標にもなってきた。さらにその根底には、生と死に関する哲学、医学倫理、そして仏教、キリスト教を問わず神学にも精通され、そこから生まれた確固たる哲学がお在りになられるからこそ、あれだけのことが自然に行動にでてらっしゃるのであろう。

正直に言って、ある程度の負債は負うことになる。しかし、理想の医療を追求した結果として、その報酬は後からついてくるものと信じている。教授がおっしゃるように、若いうちにはそのエネルギーを財産として頑張り、竹山耳鼻科一派の一員として、その名に恥じぬような医療を心掛けて、地域医療に貢献したいと思っている。

最後に、これまでにご指導、ご鞭撻を賜りました竹山主任教授を初めとする医局員の諸先生方に厚く御礼申し上げると共に、引き続き今後とも諸所においてご教示下さいますようお願い申し上げます。

「竹山教授との四年間」

楠　恵

緑色の小さな辞書を手元に置いて、感慨にふけりながら今これを書いています。この辞書は、小桜書房の『用字便覧』、表紙の下の方に金色の文字で、「第十二回日本頭頸部腫瘍学会」と記されています。

昭和六十一年から四年間、私は竹山主任教授の秘書としてお世話になりました。そのなかでも、思い出深いのが、竹山先生が会長をされ開かれた「第十二回日本頭頸部腫瘍学会」の前後の頃のことです。

ある日、竹山先生が私に話がある、と改まった様子でおっしゃり、いつも座ったことのないソファーに座り緊張している私に、学会の会長に選ばれた旨を話され、「松本さん（私の旧姓）も忙しくなるだろうけれど、よろしく」と言われました。それまでは不出来な秘書の私は、失敗ばかりしてお叱りを受けることもたびたびありましたので、そのときは、「こんな私でも信頼してくださっている」というれしい思いでいっぱいになったことを覚えています。

学会の準備が始まってからは、目の回る忙しさでした。竹山先生は、ふだんのお仕事（外来での診察、学生への授業、手術、教授会への出席など）に加え、学会の準備をされ、また、たしか同じ頃、入試委員長もされていましたから、そのころは大げさではなく〝超〟多忙な生活をされていました。よくお身体をこわされなかったと思うほどです。

人に会われることも多かったのですが、教授室にゆっくりされている暇がないため、約束の時間を調整するのが大変で、お客様に廊下で待っていただくようなこともよくありました。夜も遅くまで机に向かわれていました。

〝エネルギッシュ〟という言葉ほど、このときの竹山先生にふさわしい表現はないでしょう。仕事熱心で、決して手を抜くことをされない先生の〝自分に厳しい〟お姿に接し、至らない私はいつも圧倒され通しでした。

お仕事を離れれば、人間味あふれ、面倒見のよい耳鼻科教室という大家族の父親的存在でもありました。

恥ずかしながら、勤め始めの頃、私の入れたお茶がおいしくなかったのか、先生自ら、おいしいお茶の入れ方をにこやかに教えて下さったことがあります。今でもお茶を入れるたびに思い出します。感謝しながら…。

B・S・Lの学生を土曜日の講義のあと、教授室へお招きになり、コーヒーを飲みながら雑談されたり、顧問をされていた柔道部の学生と交流されたり、もちろん医局の先生方ひとりひとりをいつも暖かい目で見守っていらしたことは言うまでもありません。

そして何よりも、奥さま、お嬢さまのいらっしゃるご家庭を心から愛され、大事にされていらっしゃるご様子はうらやましいほどでした。

このたび、竹山先生ご退官と伺い、まだまだお早いのでは、という思いでいっぱいです。

先生ご苦労様でした。

威厳と、やさしさと、ちょっぴりこわさを備えた竹山先生と過ごさせていただいた日々は、貴重な思い出としていつまでも大切にしていきたいと思います。

竹山先生に感謝

飯田典子

「四門会」誌に私の拙い文のスペースをいただけるということに感謝しております。自分が書いたものが、そのまま本に載せられるのは中学・高校で文集に書いたこと以来でして、緊張していますが少しの間おつきあい願います。

私は平成二年四月、耳鼻科主任教授秘書として入職し、もう五年目を数えます。この間、特に思い出深く残っているのは、竹山先生を会長として横浜で開催された、耳鼻科の学会の中でも最も伝統と歴史のある大きな学会（平成三年十一月、第五十回日本平衡神経科学会、平成五年七月、第五十五回耳鼻咽喉科臨床学会）を二度も主催したことです。その準備から残務整理が済むまで、私が至らないばかりに、竹山先生にご迷惑をお掛けする毎日でした。私がもっと気を張って、先生のおっしゃる通りにしていれば、そのミスは防げたものばかりです。自分でも情なく、不能ぶり、ばかさ加減を痛感しました。

そして、こんな私を毎日相手にされ、しばしば血圧の上がる思いをされた先生は、第五十五回耳鼻咽喉科臨床学会を目前に控え、体調を崩されて入院されたことは、私がこれまで生きてきて相手にさせてしまったことの一番悪いことです。〝もうこれ以上先生を苦しめるわけにはいかない。責任をとらなくては。〟私は配置転換、退職を覚悟で、退院された先生に大学の教授室で再会をしました。「これからはちゃんとするんだろうね。それならそれでいいんだ。」という先生のお言葉に私の目頭は熱くなり、もう一度チャンスを与えて下さった先生に感謝し、もう同じ失敗を二度と繰り返さない。という気持を胸に再出発しました。

竹山先生は〝仕事の鬼〟というに相応しく、教学委員長、大学病院副院長をなさっていた時、学会とそれらの会議が重なった時には、わざわざ学会先から新幹線で駆けつけて、その会議に出席され、ご自分の任務を果されたことは思い出深く残っています。この通り、先生は何よりも相手をまず第一優先に考えられ、ご自分のことは一番最後にいつもなさっていたせいか、大学の横の駐車場には夜遅くまで竹山先生のお車だけが一台ポツンと止っていました。

人の縁というものは、とても不可思議で、素晴らしいものです。

竹山先生と共に過させていただいた五年は、私にとりまして大変貴重な、もう二度となし得ない時で、これからの尊い人生の肥しとなっていくことと思います。そして、先生の奥様やお嬢様にお会いできたことは、同じ女性として目を張ることばかりで大変勉強になりました。話し方や立ち振るまい、言葉使いなど、女性としての気使い、心使いは本当に美しいものでした。こんなに素晴らしいご家族に恵まれて本当にお幸せのことと思います。また、主婦となった私は、それをお手本にしたいとも思っております。

昔から教師は出来の悪い子は印象に残るといいますが、竹山先生も不出来の秘書の私のことはずっと覚えていてくださることでしょう。

何も出来ない、何も知らない私は竹山先生が暖かく見守ってくださったお蔭でここまで

来ることができましたし、結婚もできたと思っています。

竹山先生、本当に有難うございました。

竹山主任教授退職記念講演を拝聴して

田沢　卓

去る平成七年一月二十日、当医科大学三階大講堂において竹山主任教授退職記念講演が行われました。立ち見が出るほどに会場は熱気で溢れ、座長である宇治教授の紹介とともに壇上に現れた竹山先生は約一時間の熱弁をふるわれ、その内容は竹山教室十九年間の集大成ともいえる素晴らしいものでした。講演のテーマは竹山先生が御経験された数々の症例の中でも、その後の臨床医としての方向性を決める契機となった症例の抜粋という貴重なものであり、次々に提示されるビデオに思わず引き込まれ、あっという間の一時間だったような気がします。講演内容は竹山先生がライフワークとされてきた頭頸部外科学と神経耳科学の二つの領域に大きく分けられておりましたが、入局以来竹山先生の手術に魅せられ頭頸部腫瘍領域に興味を持ち、その道を志している私にとって頭頸部外科のお話は大変な教訓となり、一臨床医として改めて臨床の難しさを再認識させられることとなりました。癌患者の治療において、現代においてはその生存率だけではなく、いかに高いＱＯＬを得るかが重要であり、これは特に担癌生存中の患者さんにおいては非常に難しい事です。悪性メラノーマの症例提示において、入退院を繰り返しながらも病態の本質を知り尽くしたうえで己れの業務に対する信条を貫いた患者さんのお話は心打たれるものであり、これは竹山先生の的確なインフォームド・コンセントにより成されたことは間違いなく、治療方針を打ち出す前に、患者さんの人間としての尊厳や人権が守られているかどうかをまず問うべきであることを教えられました。不幸の転帰に至った十一歳の上咽頭癌の症例提示では、御両親が剖検を承諾されただけでなく、その後も家族の病気のことで竹山先生を頼って来院されたお話を聞き、医師として信頼されること、そして真の医師と患者との結び付きを得ることのすばらしさを教えられました。竹山先生の退職記念講演を拝聴し、我々若い医師にとって竹山先生の歩んでこられた長い足跡の一部にでも触れることができたことに感謝しています。そしてこれからも竹山先生の教えともいうべき教室心得を心の支えとし、医学の発展と地域福祉に力を尽くしていけるよう願っております。竹山先生本当にありがとうございました。

「ご挨拶と思い出」

高橋　姿

平成七年一月より聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科学教室にお世話になる事になりましたので、ご挨拶と自己紹介を申し上げます。

出身は「カカア天下とカラッ風」の本場、群

馬県は前橋市です。昭和五十一年に新潟大学医学部を卒業、本学客員教授の猪先生が当時主任教授を務める耳鼻咽喉科学教室に入局しました。昭和五十六年からは中野教授のもとで卒後十九年間、主に中耳炎症疾患の病理、疫学、手術療法について研究を行って参りました。

平成五年の暮れに聖マリアンナ医科大学へ助教授として来ないかとのお話をいただきましたが、日耳鼻新潟総会や私自身の仕事の都合で本年まで延ばさせていただきました。今後は本耳鼻咽喉科学教室発展のため頑張りたいと思いますが、不慣れのため多々ご迷惑をかけると思います。諸先生のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申しあげます。

ところで、私の本学勤務は今回が初めてではありません。ご承知の方も多いと思いますが、聖マリアンナ医科大学の一期生が卒業する以前、新潟大から常時三〜四人の医師が手伝いに来ていました。私もその一人として昭和五十一年の暮れから五十二年の春にかけて、お世話になりました。明石会館の上にあった研修医室を宿舎として、現新潟大助教授の五十嵐秀一先生と医局（今の助手室）で連夜酒盛りをしたのは青春の楽しい思い出です。竹山教授にはウイスキーを差し入れしてもらいました（ごちそうさまでした）。病棟ナースの平均年齢は二十二歳（！）で、ときに看護婦寮にもお邪魔して、ごちそうになりました。なにより、新潟以外の大学病院を経験できたこと、合宿生活で様々なディスカッションを行ったこと、竹山教授や形成の田井助教授に再建を加味した最先端の頭頸部外科手術を見せてもらったことなど、その後に役立つ貴重な経験をさせていただき、深く感謝していました。

加藤教授については新潟大医学部五年時の臨床実習が強く印象に残っています。スイス留学から帰国直後の先生は、当たり前ですが今よりさらに若々しく、指導にも他の教官と比較してメリハリがありました。実習の後半に局所所見の取り方をほめられ、翌日からの実習を免除してもらったのにはいたく感激し、耳鼻咽喉科入局の一因ともなっています（単純！）。山形大赴任のため新潟ではご一緒できませんでしたが、私が昭和五十四年に山形県立中央病院出張の際には手術に来ていただき、いろいろと教えてもらいました。

今回、このように縁深い両教授の下で再び、働く機会を得ることができました。はたしてお役に立つかどうか不安ですが、自分なりに精一杯努力する所存です。教室ならびに同門の諸先生のご助言、ご指導をよろしくお願いいたします。

主任教授就任のご挨拶

加藤　功

この度、竹山勇教授の定年御退官の後任として耳鼻咽喉科講座を担当することになりました。当耳鼻科教室は昭和四十六年荻野洋一教授が初代教授として教室を主宰され、昭和五十一年形成外科主任教授になられたのを契機に竹山勇教授が第二代目主任教授として教室を主宰してこられました。実に十九年間の長きにわたっており、教室も黎明期より円熟期に入っていると思われます。その間私自身もその教室の一員として色々御指導を受け、数

多くのことを学んでまいりました。しかし、これからは私が今までの竹山教授の立場に立たされるわけで、いざ講座を担当するとなると、改めて自分の浅学菲才さを感ぜずにはおられません。あれこれに思いをめぐらす時、先代が築かれた教室を引きつぐことの重大さを身にしみて感じております。とは言え、教室を発展させるのが私に課せられた使命であります。今後は教室員と共に歴代教授によって培われた学問の伝統、同窓の和を大切にし、人材の育成、教室の発展を計りたいと思います。

耳鼻咽喉科は名前が示すように顔面・頭頸部の疾患を対象とする奥行の深い、色々な研究課題を持つ巾広い領域です。この中で頭頸部腫瘍は竹山教授が心血を注がれた領域でヒトパピローマビールスによる喉頭乳頭腫に関する一連のお仕事は日本においては勿論のこと世界にも通ずるものであります。この方面の治療面等に将来遺伝子治療が導入されてくると思われます。現在のスタッフはこれに対して十分対応できると思うし、ますます斯界をリードするように心掛けたいと思います。その他診療にあたっては各部門を反映すべく特殊外来に患者を集め、密度の濃い診療を心がけております。第一に臨床系教室が目標にすべきことは、常に最高水準の診療が出来ることです。それは単に技術面のことだけではありません。患者が外来を受診し入院して治療を受ける。やっぱりここで治療して良かったとじっさいに感じさせるものでなくてはなりません。医師は優れた専門家であると同時に、良識ある社会人、心温かい家庭人でなければなりません。優れた診療の場に学生や若い研究医が入れば教育は必ず成功すると思われます。そこには難しい教育理念もカリキュラムも必要ないのです。優れた診療の場には多くの患者が集まり、したがってそこから多くの臨床研究のテーマがまた生まれるでしょう。患者の診療に献身的に盡す若者が、そのテーマに取組めば、一層患者の幸せにつながるのではないでしょうか。そのような医師づくり、教室づくりを目指したいと思います。

私が担当する期間は長いととられるか短いと考えられるかは各人によると思われますが、それは仕事次第で短くも、長くもなると思われます。私はこの期間中に人生の選択をせまられる人、この期間に将来の方向づけがなされる人が居られることを十分承知しております。私は、そのような人達が十分活躍する場を作り、世界に通ずる耳鼻科医を育てたいと思っております。教室員諸君、共に手を携え、目的達成に向って歩もうではありませんか。

新入局員紹介

五年ぶりの耳鼻科医局

芋川英紀

私はBSLの授業で竹山教授執刀による中耳癌の手術を見学する機会を得た。そしてここに頭頸部外科手術の迫力と竹山教授の流れるごとき手術手技に強い感銘を受け、卒業と同時に同科の門を叩いた。そして二年間の研修期間中は主に大学及び諸先生方の御指導のもと関連病院において耳鼻科の勉強をさせていただいた。そして研修最後の数カ月間に頭

頸部の再建技術を勉強すべく形成外科へのローテイトを許可していただいた。ここで耳鼻科・形成外科の共同手術に数多く参加する機会に恵まれた。そして竹山教授の特別の御配慮の結果、形成外科医局に移籍することとなった。形成外科では主に顔面骨々折・唇顎口蓋裂・顔面口腔内奇形さらに頭頸部腫瘍切除後の再建、特にマイクロサージェリーの技術を十二分に勉強させていただき、同科の専門医の資格まで修得することになった。しかし形成外科の守備範囲は広く頭頸部のみの症例だけを扱うわけには行かない。元来頭頸部の再建技術の修得を目的に同科に移籍した私にとってはこのまま形成外科医として進むか、あるいは又古巣の耳鼻科に戻り再建以外の耳鼻科一般のより広い知識を再び勉強するか否か。この二者択一の決断を下すにあたり、私にとって三十三才の冬は安眠もままならぬ辛い日々が続くこととなった。こんな冬のある日、手術室で南医局長より「芋ちゃん、帰って来いよ。」という一言、そして今後の進路について竹山先生を御伺いした際の、先生の非常に心強い励ましの御言葉で、私は耳鼻科医局への再入局を決意した。この時の竹山教授の御助言については師の底知れぬ心の広さと優しさを改めて痛感した次第である。そして私は平成六年四月より又耳鼻科医局に御世話になることと相成った。諸先生方におかれましても以前と変わらず大変暖かく迎えていただき、特に現在勤務中の西部病院においては、大橋教授・佐藤講師両先輩に身に余る様な御指導をいただき、ただただ感謝する以外無い次第である。現在の心境は「やはり耳鼻科に戻って良かった。」の一言に尽きる。今後は一日も早く耳鼻科医として一人立ち出来る様になるべく、症例一つ一つを大切に扱い、しいては医局の為に役立てる様最大限の努力を惜しまぬ所存である。そして微力ながらも、私が形成外科で得た知識と技術が耳鼻科医局の為に役立てる事が出来る機会があれば至上の喜びに思う。

聖マリアンナ医大の耳鼻咽喉科教室に入局して

菊地　仁

私は平成六年三月、東海大学医学部を卒業、第八十八回国家試験に合格し、聖マリアンナ医大耳鼻咽喉科教室に入局しました。私が母校に残らずに、ここマリアンナを選んだのには、幾つかの理由があります。実家から近いことや、私の父が大橋教授と親交が深いこと等もありました。しかし、決め手となったのは、私の研修医採用試験の面接をなさって下さった、竹山主任教授にお会いしたことでした。他大学の大学病院で働くことに少なからず、不安を感じていた私が、教授にお会いして、その誠実な人柄と前向きな人生観に感銘し、その不安感が一掃された思いでした。そして、この大学で研修すべきだと思い、母校に残らない道を選びました。実際に約半年働いてみて、感じたことは先生方や看護婦さんたちが、とても親切に接して下さり、又ご指導していただいたことでした。特に、堤先生、佐藤先生を初めとする諸先輩先生には、他大学出身者で、右も左も分からない私に、親身になってご指導いただき、唯々感謝の気持でいっぱいです。これからも宜しくお願いいたします。又、私と同期で入局した萎澤・関・新谷各先生方には、格別のはからいを受け、感

謝しております。

生意気ですが、いろいろと私が入局してからのマリアンナに対する感想を述べて参りましたが、この大学全てに感じられることは、良いことはどんなことでも素直に受け入れ、それを消化する土壌を持っていること、また立場の上下に関係なく、対等に議論できるところだと思いました。このことは非常に大切なことであり、私の母校でも取り入れてほしいと痛感しております。これからも、ご迷惑をかけることも多いと思いますが、何卒宜しく、ご指導のほど、お願いいたします。

今までの私、これからの私

萎澤　えり子

一九六九年十月二十二日、埼玉県行田市に生まれ、十八年間多少の波風はありましたが穏やかに過ごしてきました。私の父は大変厳しく、学校の帰りがいつもより一時間遅いだけで説教をする程でしたので、楽しい高校生活とはほど遠いものでした。そういったこともあり、大学に入学し一人暮らしを始めた時は、第二の人生の幕開けのようなものだったのかも知れません。同時に、家族に対する愛情も少し深まったような気がします。

私の家族は祖父以外全員血液型がA型で、私も血液型性格判断の例外となることなく几帳面だと自分でも思い、またよく友達にも指摘されます。ただこの几帳面さは完璧なものでないため、自分の予測・想像通りにならないと自分が腹立たしくなります。そんなときは友達に「怖い！」と言われ自己嫌悪に陥ってしまいます。しかし最近は完璧でない自分が段々好きになり、大人になったものだと感銘を覚える今日この頃です。

さて平成六年の春に耳鼻咽喉科に入局し社会人としてスタートしてから九か月が経ちますが、初めは緊張と戸惑いの連続でした。周りには、当然ですが年上の方ばかりで、今まで同年代の人としかあまり会話をしたことがないため敬語がうまく使えず、また自分の居場所が分からない、と言った具合でした。最近やっと流れに乗り、周りを見ることが出来るようになりました。耳鼻科に入局した一番の理由は、手術がやりたいということでしたが、今でもその気持に変わりはありません。女性が働くことは世間がどう変わろうと色々な面で難しく、結婚し、子供が生まれればなおさらです。さらにわたしの場合几帳面な性格が加わり、すべてを完璧にしようとするため爆発するのは必然です。それを避けるため、しかも自分に納得できる生き方、（医師として、女性として）を見つけることが、今の私の課題です。どうぞこれからも御指導の程よろしくお願い致します。

一研修医の小さな抱負

新谷　敏晴

光陰矢の如しと言うのか、当科入局以来早や半年が経過した。日々与えられた仕事（ノ

ルマ）を事務的に処理する機械と化していた自分にようやく物事を考える余裕がでてきた最近、地方会デビュー、さらにはこの四門会原稿という文才に欠けた馴れない頭を酷使している状態である。『何のこれしきの事ぐらいで…』と諸先輩の叱咤が飛び交うのであろうが、それだけ充実した毎日を過ごせているという事なのだろうか。

改めて自己紹介をさせていただくと、昭和四十四年和歌山県生まれ、出生後東京へ移り無事某私立高校を卒業し、当大学へ入学、卒業と実に順調でありながら平凡に経過した。性格的にもやはり今日までの道程同様、平々凡々の人間である。大学時代は蹴球部に所属していた事もあり、前例先輩の様に豪快かつ明晰と思われがちであったが、伝統を受け継いでいるのは酒豪な事ぐらいなのか、比較的珍しいタイプと言える。この『平凡』という性格は長所とも短所ともどちらとも受け取りづらいものである。集団の中の一個人としては有利であるが、いざ偉くなろうとすればnegative factorとなってしまう。生かすも殺すも本人次第なのか…

我々本年度の研修医は竹山主任教授の最後の門下生となる。御一緒できた期間はわずか一年間であったが、得たものは新鮮でかつ密度が濃かったと思える。今後もこの教えを生かし、さらなる当科の発展のための一歯車となる様努めたい。

竹山教室に入局して

関　良武

昨年の医師国家試験に合格し、聖マリアンナ医大耳鼻咽喉科に入局し、早いもので八ケ月が過ぎました。時々、明石会館や図書館に行くと、今でも医師国家試験に対する精神的プレッシャーを思い出します。しかし医師としては、まだ始まったばかりで知識の不足や経験不足を、毎日痛感しています。しかし、諸先輩の方々から親切に指導して頂き、充実した毎日を過ごしています。

私がこの医局を選んだ理由は、ＢＳＬで勉強に来た時に、医局の雰囲気の明るさや、臨床面、研究面においても、竹山先生をはじめ先輩の先生方の活発さを感じたからです。それに、耳鼻科という科は、めまいなどの内科的な疾患や頭頸部腫瘍などの外科的疾患もあり、取り扱う範囲が広いということも魅力に感じました。

私の将来的な目標としては、竹山先生のように、臨床を重視した研究を行い、常に他の人のやらないことを考え、チャレンジしていきたいと思います。竹山先生が今まで、築かれてきた伝統と実績を傷つけぬよう、さらにこれからも発展し続けるように努力していきたいと思います。

国内外派遣報告

国内留学を経験して

鈴木　毅

平成三年九月から平成五年八月までの二年間、群馬大学病理学第二講座において研修の機会を与えていただいた、教授である中島孝先生は、国立がんセンターの病理室長を前任された先生で、当時そこで先輩である堤先生や星川先生が研修されていたという縁があり、腫瘍の分子生物学的研究を志望した私は、竹山教授の御配慮により中島先生を紹介していただいた。

九月の前橋はとても暑く、気候は川崎とあまり変わらないではないか、というのが群馬の印象であった。（冬になって大きな間違いだということに気付いた）第二病理は教授一人、助教授一人、講師一人、大学院生四人、技師三人という、小さな教室であったが、良く言えばアットホームな雰囲気であるとも言え、私は教室の皆さんにあたたかく迎えられた。臨床系の教室しか知らなかった自分にとって、基礎系の教室の生活は、一層新しいものに感じられた。朝は九時のお茶から始まる。そこではその日の仕事のスケジュールの確認が行われる他は雑談の時間で、教室員全員が集合する。朝のお茶が終わると、仕事に取りかかるわけである。ある者は標本をよみ、ある者は実験をし、といった様に各自仕事に散っていくのであるが、十二時少々前になると誰ともなく集まり食事に行くわけである。そして昼休みのお茶をし、お茶が終わると、また仕事に散っていくのであるが、午後五時になるとまたお茶をするのであった。技師さんはここで業務終了となるが、われわれはここからさらに仕事を進めるという生活であった。夕食は外でとることが多かったが、友人となった酒豪の大学院生と教室でとると、そのまま宴会になってしまうこともあった。しかし、そのような時の会話から、ひらめきを得ることもあり、研究において恵まれた環境であったと感じている。そして、群馬での研修生活や中島教授の紹介により知り合う事のできた人々は、自分にとって大きな財産となっている。最後になりましたが、このような貴重な研修の機会を与えて下さった竹山教授に感謝致しますと共に、応援して下さった諸先生方に、この場をお借りして御礼申し上げ研修の報告とさせていただきます。

近況報告

国立がんセンター中央病院二十五期レジデント　小松崎　靖

二年前の或る日、大学研修終了後、国立がんセンター中央病院のレジデント採用試験に応募したいと恐る恐る竹山先生に申し出たところ、それは素晴らしいことだと殊のほか激

励を頂き、勇気づけられた。幸いにも採用の通知を受け、平成五年六月一日より、慌ただしく築地に赴任した。レジデント生活も、はや一年半が過ぎ去ろうとしている。

当院のレジデント制度は昭和四十四年に発足し、以来四半世紀に及び、諸先輩方は中央病院、東病院、あるいは、全国の癌関連施設でご活躍中であると伺う。

レジデントの期間は三年間で、一年目は病理・診断系部門を、二年目、三年目は臨床系部門のローテーションを原則としている。研修医時代のローテーションとはまた違って、自分の専門を通して、客観的に他科の診療に触れ得る機会はそう滅多にないことなので、貴重な体験と考えている。

現在私は中央病院頭頸科に在籍中であるが、スタッフ三人、レジデント一人、総勢四人で三十人程度の入院患者の手術、病棟マネージメント、内視鏡、透視等の検査、カンファレンス、外来業務（レジデントは除く）に追われている。現在、手術は週三ないし四件で、少なくとも週一件は再建の必要な手術が行われている。原則としてレジデントは手術症例は全例第一助手となり、頸部郭清術、甲状腺手術、咽頭全摘術などの症例のうち、easy case についてはレジデントの力量に応じて、術者となり得る。臨床漬けの毎日であるが、スタッフの先生方の熱意あるご指導のお蔭でなんとか乗り切っているというのが現状である。平成七年三月より半年間、東病院頭頸科での研修の予定だが、中央病院よりも更に症例が多彩であると聞き、今から心待ちにしている。

レジデントの三年間の経験で何を、どの程度学びえるか心許ないというのが本音であるが、竹山先生をはじめ、医局の諸先生方のご厚情に少しでも報いるべく、研鑽を重ねる所存である。後輩諸君も私を是非利用して欲しい。

川崎市派遣・瀋陽市東洋医学研修紀行

岡田智幸

平成六年九月八日より同年十月七日までの三十日間、川崎市と姉妹都市である中華人民共和国の瀋陽市において、中医研修を行ってまいりました。ここに、中医研修紀行とその雑感を述べたいと思います。

一．瀋陽市について

瀋陽市は人口約六六〇万人、日本の高度経済成長期をおもわせる活気に満ちた都市である。その反面、スモッグがたち込めている。

市内は、都市部と農村部とに明確に分けられている。市内街路には、必ず街路樹が植えられ、特に、街路に垂れた柳の枝葉は、一様に、かつ、均一に路上からの丈を保っており、柳の下を通り過ぎる人々、自転車の多さを物語っていた。市内を流れる河川には公園があり、市民の憩いの場となっている。

二．研修所について

瀋陽市中医研究所は瀋陽市中医院に付属しており、研究所には、中医基礎理論、針灸、気功、薬理、画像センターなどがある。

三．研修カリキュラムについて

九月十日より九月二八日の午前中まで、日曜日を除く毎日、研修が行われた。

まず中医基礎理論を李主任医師（主任教

授）より中医学院で履修する二〇〇時間の基礎理論のエッセンスを外来臨床実習をふくめて学んだ。

針灸については中国国内でも著名な薫主任医師と侯主任医師の二人の先生より外来臨床実習と針灸基礎理論を学んだ。

気功については、内科医でもある馬医師より基礎理論を、張先生より実技を学んだ。

中医基礎理論は、針灸、気功にも通じ、昨年度までの派遣研修生の要望が取り込まれ、私共が研修する上で、非常に中医を理解する助けとなった。私は日本東洋医学会の認定専門医でもあるが、学会の講習や、参考文献で今まで学んだ知識を一掃するような衝撃的でもあり、かつ充実した研修内容であった。（ヒトの体は絶えず変化しており、日本のように、漢方薬を二週間以上も投与するなんてとんでもないことなのである。）

針灸については、従来の針ばかりではなく、磁石や冷却法を取り入れた新しい方法も目の当たりにし、驚嘆した。特に耳鼻科領域である顔面神経麻痺の治療などには応用でき侯先生の考案した磁釘針などは、西洋医学的治療後のリハビリに効果的であると思われた。（早速購入した。）

気功に関しては、中医の中でも、重要な位置を占めていないようであるが、実技や静功を学んでからは、特に、健康の保持・増進やメンタルの健康管理には適していると思われた。（一産業医、コンサルタントとして、またスポーツドクターとして応用できる。来てよかった！）

四．瀋陽市での生活について

宿泊は、昨年度までの派遣研修生の要望が取り込まれ（今回が、第四回めの派遣研修）、二つ星の華星大厦というホテルであった。但し、給湯は二十四時間ではなく、朝シャンは無理であった。

食事は基本的に、ホテルで三食をとった。日本で有名な料理は「麻婆豆腐」程度しかなく、どんなものが出てくるか皆目見当がつかなかったため、食卓は固定され、その場に座れば、三－五品の料理が次々と運ばれてくるよう、瀋陽市中医研究所の所長助理（副所長）であり、私共のすべての担当であった、賈先生と通訳の劉先生にお願いした。朝食に関しては、紙に中または西を書くか、中（ゾン）あるいは西（シー）とウエイトレスに言えば、中はお粥、西はコンチネンタル・ブレックファースト様のものが出てくる。西では、ミルクはスキムミルク、コーヒーはネスカフェであった。中のお粥はやや味気無いので梅干しや、ふりかけがあると丁度よいと思われた。昼・夕食は、どのメニューでも、主にニンニク、ショウガ、ネギで味付けされ、たいへん私共の好みにあった食事で、おいしくいただけた。（これこそが、中国料理か。日本の中華料理は、日本人の好みにあわせ、日本で、フランス料理風に豪華に、独自の進化を遂げた感がある。事実、宴会の席では、この食事は何に効くとか前述の先生方の説明もあり、医食同源を説いておられた。）

水に関して、蛇口を捻ると薄い赤茶色の水が出てくる。ポットのお湯も良く見ると赤茶色の沈殿物がある。洗濯すると、衣類が赤茶色に染まる。（衣類は帰国後、再度洗濯すると、きれいにもどるようである。）生の水は、朝の洗顔、歯磨以外には使用しなかった。市販のミネラル・ウオーターは栓のしっかり締まっているものと、持ち歩いていると、栓から水が漏れているものとがあり、水が漏れるものについては、持参した万能ポットで煮沸してから飲用した。

テレビニュースに関して、政治、外交の

報道が目に付く（英語放送も同様）が、日本で報道されていた中国国内のコレラの流行を国際電話で知るまでは、全く知る術もなかった（国際電話は十五分で約二百五十元であり、全て、北京経由で雑音が大きい）。

五．瀋陽市による接待について

瀋陽市側は私共を、「川崎市の親善使節」として迎え、最大級の歓迎であった。

九月八日大連まで、瀋陽市中医院院長の孟先生、劉正貴處長、賈先生と通訳の劉先生らが出迎え、瀋陽市衛生局長の孫先生（労働衛生が専門）主催の晩餐会

九月九日瀋陽市中医研究所での歓迎会、この際、おみやげをいただいた。

九月二十一日瀋陽市副市長（ＡＩ副市長は外科が専門）主催の昼餐会、この際おみやげをいただいた。（ＡＩ（アイ）先生の漢字は略されており、通訳の先生にお聞きしても旧漢字は分からなかった。）

九月三十日瀋陽市衛生局長主催の送別会（お世話になった運転手の方まで全員参加）この際、修了証書とおみやげをいただいた。

日曜日は市内・市外の観光も瀋陽市企画の予定通り行われた。

なお、針灸研修（侯主任医師）の模様は、後日、瀋陽市電視台の午後六時三十分のニュースで、放映されたらしく、副市長主催の昼餐会の模様も瀋陽日報に掲載された。

瀋陽市の全日程を修了。

十月二日瀋陽机場（空港）まで瀋陽市中医院院長の孟先生、劉正貴處長らに送って頂き、賈先生と通訳の劉先生らと共に、私共は北京、上海へと向かった。北京、上海では、有名な観光地はすべて案内された。

十月七日帰国。

六．感想と今後の展望

瀋陽市での生活には何等不自由せず、瀋陽市、瀋陽市衛生局、中医研究所側のこと細かな配慮には感謝する。特に、賈先生と通訳の劉先生にはただただ感謝の思いでいっぱいである。

日本国内の通説では、中医あるいは漢方というものは、慢性疾患に効き、長期間投与されていても無害であるという評判であるが、実際には、漢方薬の処方は四日で、全て、煎じていた。人間のからだは、その都度あるいは絶えず、変化しているという考えを持ち、この考え方は西洋医学よりも釈然としていることがわかった。また、急性疾患にも積極的であった。中医の診断や治療効果の判断材料に西洋医学の最新の検査（ＣＴ、ＭＲＩ）を導入していることには驚いた。

病気というものは、たとえ同じ病名であっても、個々によって、その症状は異なる。今回、中医研修の機会を得、検査検査の西洋医学で、忘れがちな「個々を診る」という最も重要な事柄が再認識できた。

七．雑感再び

中国とは面白いところである。四千年の歴史といわれているが、早速、六千年の歴史と訂正された。故宮のパンフレットでは、国内向けと海外旅行者向けのものとはおおちがいで、写真の多い海外旅行者向けのものに比して、きれいさはないが、物のいわれ、何故そこに置いてあるのか等々、事細かに国内向けのパンフレットには記載されていた。これも文化大革命以降のことらしい。（文化大革命時には歴史的建造物が壊されたり、ペンキを塗られたりしていたのに…。）

文化大革命は知識階級の人々には、かなりの影響を及ぼしていたようである。書物、文献類は焼かれ、農村労働を強いられ…。今回お世話になった先生方の中にも、農村労働経験者がいるとかいないとか…。今では、

改善されているとはいえ、それでも週一回の党の研修会がどこの病院でもあるようである。（但し、それほど強制力はないようである。）

中国とは面白いところである。すべての人々は身分証明書を携帯し、番号を登録されている。驚いたことに、出身民族まで記載されている。漢族に次いで多いのは、回族すなわち、イスラム教徒である。確かに、回族の飲食店の証拠である青色の看板が目につく。中国では宗教は自由なのである。

番号登録といえば、前述の副市長さんの車のナンバーは、六ケタ中の三ケタで、車種はトヨタのクラウンであった。中国ではナンバープレートを見れば、その地域の社会的地位が分かるという。市長さんが一番かというとそうではないらしく、だれが乗っているのか知らないが、車種は自由に選択でき、1、2番は、ベンツのリムジン、3番は、トヨタのクラウン、7番はベンツであった。十月一日国慶節当日、テレビを食いいるように見ていたが、江澤民さんの車はとうとう写らなかった。果たして何番なのか？

ざっと雑感を述べてみました。今回の研修は短期間ではありましたが、中国の諸事情も見聞でき大変有意義でありました。また、ご紹介が遅れましたが、私共とは、小生の父の恩師の一人である名越好古先生のご長男である名越温古先生（本学第三内科・血液がご専門）と私岡田の二人であります。耳鼻科所縁の先生とご一緒できたことは私にとって誠に幸せでありました。小生の父の十八回忌を終え、中国で名越好古先生と父の苦労話や昔話に花を咲かせることができました。

本研修のため、川崎市にご推薦いただいた竹山勇主任教授に深謝致しますと共に、この機会を大切にするよう激励をいただいた当耳鼻咽喉科学教室の諸先生方に感謝致します。

学位授与者一覧

(甲)

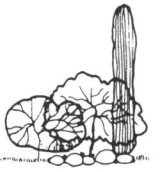
	氏　　名	授与年月日	論　　文　　名	掲載雑誌名
1	堤　康一朗	H. 1. 3. 6	生検組織形態からみた声門上癌の臨床病理学的研究	日本耳鼻咽喉科学会会報
2	中島博昭	〃	後半規管神経刺激により前庭神経四亜核内に発生する細胞外電場電位	〃
3	佐藤成樹	H. 2. 3. 5	後半規管神経刺激による同側性前庭一頸反射の電気生理学的研究	〃
4	岡田智幸	H. 2. 3. 5	視索核に投射する網膜神経節細胞の分布について —視運動性眼振と関連して—	〃
5	佐久間　惇	H. 3. 3. 4	後半規管神経刺激によりネコ大脳皮質後十字陥凹に発生する細胞外電場電位	〃
6	星川智英	H. 4. 3. 2	下咽頭癌におけるヒトパピローマウイルス（HPV）DNAの検出	〃
7	矢崎裕久	H. 5. 3. 3	実験的滲出性中耳炎における耳管鼓室口粘膜の微細構造	聖マリアンナ医科大学雑誌
8	鈴木　毅	H. 7. 1.11	唾液腺癌におけるp53遺伝子変異と核DNA解析およびAgNOR法による腫瘍増殖能の検討	日本耳鼻咽喉科学会会報

(乙)

	氏　　名	授与年月日	論　　文　　名	掲載雑誌名
1	戸田行雄	S.58. .9.19	ホルモン音声障害の基礎的研究 —家鶏における発声器の器質的変化について—	耳鼻と臨床
2	大竹英夫	S.61. 3. 3	頭頸部扁平上皮癌症例における間質反応の臨床的意義	日本耳鼻咽喉科学会会報

	氏　　名	授与年月日	論　　文　　名	掲載雑誌名
3	漆畑　保	S.63.11.21	咽頭組織の男性ホルモン親和性についての実験的検討 —Andorogen affinity on human laryngeal tissues—	日本耳鼻咽喉科学会会報
4	飯田　順	H. 1. 6.19	モルモット上丘の視覚ならびに眼運動系に関する実験的研究	〃
5	岩澤　寛	H. 1. .6.19	家兎小脳核電気刺激による眼球運動に関する実験的研究	〃
6	菊地原　基敬	H. 3. 3.18	担癌宿主におけるacute phase reactantの動態に関する研究 —血漿alpha －1－antitrypsinを中心とした考察—	聖マリアンナ医科大学雑誌
7	高橋馨子	H. 3. 3.18	末梢性顔面神経麻痺の予後判定 —多変量解析を用いた予後因子の検討—	〃
8	中島久美	H. 3. 3.18	突発性難聴の治療に関する臨床的考察 —各治療成績における比較検討—	〃
9	上杉恵介	H. 5. 1.20	担癌生体の血漿蛋白および組織蛋白の動態に関する研究 —二次元電気泳動法（O'Farrell法）を用いた分析—	〃
10	菅野澄雄	H. 5.11.10	大唾液腺癌におけるC−erbB−2蛋白の発現の有無と病理組織進行度および患者の予後との相関関係に関する研究	〃
11	赤尾一郎	H. 5.11.10	上咽頭癌におけるEpstein－Bar－Virusの検出率とその臨床病理学的意義 —分子生物学的検討—	〃
12	坂本園子	H. 6. 3.16	鼻粘膜組織のステロイド作用部位と作用機序に関する実験的考察 —ラット鼻粘膜とヒト鼻粘膜における検討—	〃
13	吉野清美	H. 6.11.16	メニエール病における血清抗Ⅱ型コラーゲン抗体及び免疫複合体	日本耳鼻咽喉科学会会報
14	岩武博也	H. 6.11.16	ヒトパピローマウイルス（HPV）16型遺伝子を導入したヒト咽頭上皮細胞の性質	〃

	氏　　名	授与年月日	論　　文　　名	掲載雑誌名
15	南　　定	H. 6.11.16	脳幹網様体刺激によって発現する眼球運動様式に関する実験的研究	聖マリアンナ医科大学雑誌
16	越智　健太郎	H. 7. 3. 1	Ⅱ型コラーゲン免疫感作動物の蝸電図変化	日本耳鼻咽喉科学会会報
17	田沢　　卓	H. 7. 3.15	舌癌における多剤耐性（MDR）発現機序に関する実験的検討	聖マリアンナ医科大学雑誌
18	釼持　　睦	H. 7 3.15	慢性腎不全の蝸牛への影響に関する実験的研究	〃



平成三年度教室業績集

著　書

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
1	○竹山　　勇	モダン・クリニカル・ポイント（金原出版）	P. 12～15	1991. 4	より良い診療を行うために—診療器具の一工夫—
2	○加藤　　功	モダン・クリニカル・ポイント（金原出版）	P. 28～29	1991. 4	めまい患者のプライマリ・ケア
3	○竹山　　勇	耳鼻咽喉科診療Q＆A（六法出版）	P. 120～123	1991. 6	扁摘手術のコツ
4	○竹山　　勇	今日の治療指針（医学書院）	P. 23～24	1991. 11	口蓋扁桃炎
5	○竹山　　勇	子供の健康は母親しだい みみ・はな・のどの病気（日本プランニングセンター）	第2刷増補改訂版 P. 159～163	1991. 11	いびき・睡眠時無呼吸症候群
6	○竹山　　勇	暮しと健康（保健同人）	P. 30～31	1992. 3	鼻中隔弯曲症—症状のひどい鼻中弯曲症は手術で改善する—

誌　上　発　表

1	○T. Ohashi K. Ochi T. Okada I. Taleyama	ORL	53(3) P. 131～136	1991. 4	Long－Term Follow－Up of Electrocochleogram in Meniere's Disease
2	○竹山　　勇	遊＆知	3(summer) P. 20～21	1991. 6	つやのある声を保つ健康法を皆様に！
3	○加藤　　功	毎日新聞		1991. 6	メニエール病—状況が許すならば早めに手術を—
4	○飯田　　順　　中島　久美 堤　康一朗　　岩武　博也 南　　定　　竹山　　勇	日本気管食道科学会会報	42(3) P. 289～292	1991. 6	一側性声帯麻痺に対する経皮的シリコン注入術
5	○竹山　　勇　　上杉　恵介 他87名	耳鼻咽喉科展望	34(補4) P. 295～312	1991. 8	Astemizole（MJD－30）の鼻アレルギーに対する臨床試験—Ketotifen fumarateを対照薬とした二重盲検比較試験—
6	○星川　智英	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(8) P. 1151～1157	1991. 8	下咽頭癌におけるヒトパピローマウイルス（HPV）DNAの検出
7	○竹山　　勇	EQぱせんてら	11(51) P. 64	1991. 9	STRIKE WHILE THE IRON IS HOT

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年次	研　究　題　目
8	○加藤　功　渡辺　昭司 佐藤　成樹　岡田　智幸 竹山　勇	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(10) P. 1469	1991. 10	視運動性眼振の皮質下経路
9	○佐久間　惇　加藤　功 岩澤　寛　高橋　馨子 荻野　貞雄	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(10) P. 1473	1991. 10	コンピュータを使用した滑動性眼球運動の定量化システム
10	○大川　勇　加藤　功 飯田　順　菊地原基敬 岩武　博也　竹山　勇	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(10) P. 1630	1991. 10	気管に浸潤した甲状腺癌 —気管端々吻合術—
11	○菅野　澄雄　＊向井　清 ＊下里　幸雄　＊海老原　敏 竹山　勇 (国立がんセンター)	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(10) P. 1416	1991. 10	大唾液腺癌のc－erbB－2 proteinとその予後について
12	○越智健太郎　木下　裕継 大橋　徹　竹山　勇	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(10) P. 1454	1991. 10	Ⅱ型コラーゲン感作動物の蝸電図変化
13	○矢崎　裕久　竹山　勇 ＊秋元　義弘　＊平野　寛 (＊杏林大第2解剖)	日本耳鼻咽喉科学会会報	94(10) P. 1535	1991. 10	実験的滲出性中耳炎における耳管中耳粘膜の免疫組織化学的検討
14	○大橋　徹　岡田　智幸 越智健太郎　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 1～8	1991. 10	メニエール病蝸電図の長期的観察　—特にSP／AP比の変動性について—
15	○漆畑　保　菅野　澄雄 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 9～15	1991. 10	ラットし視索核のGABA作動性ニューロン
16	○菅野　澄雄　漆畑　保 加藤　功　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 16～21	1991. 10	ラットし視索核におけるニューロンの電顕的観察
17	○鳥越　達也　漆畑　保 石倉　幹雄　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 22～27	1991. 10	扁桃組織内の濾胞樹状細胞群(FDC−cluster)の細胞構成
18	○飯田　順　堤　康一朗 岩武　博也　南　定 竹山　勇　＊栗原　宜子 (＊放射線科)	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 28～33	1991. 10	一側性仮声帯肥大と甲状軟骨の形態について
19	○中島　久美　戸田　行雄 渡来　潤次　吉野　清美 高橋　馨子　橋本　久子 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 34～38	1991. 10	突発性難聴におけるノイトロピンの臨床効果の検討
20	○甲斐　園子　上杉　恵介 渡来　潤次　巌　文雄 漆畑　保　大竹　英夫 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 39～47	1991. 10	ヒスタグロビン点鼻療法の臨床効果 —その免疫組織的学研究—
21	○佐藤　成樹　荻野　貞雄 越智健太郎　大橋　徹 加藤　功　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 48～51	1991. 10	良性発作性頭位めまい症に対する理学療法

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
22	○赤尾　一郎　　加藤　功 竹山　勇　　＊加茂　力 ＊清水　亨 （＊第２内科）	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 52～56	1991. 10	両側MLF症候群の神経耳科学的検討
23	○加藤　功　　飯田　順 岩武　博也　　南　定 木原　紀子　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 57～61	1991. 10	長期挿管後に起きた気管狭窄の２症例
24	○岩澤　寛　　加藤　功 岡田　智幸　　堤　康一朗 釼持　睦　　朝倉　美弥 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 62～66	1991. 10	原発性蝶形骨洞嚢腫の一例 —顕微鏡下蝶形骨洞手術の応用—
25	○菊地原基敬　　堤　康一朗 倉田　文雄　　大川　勇 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 67～73	1991. 10	舌癌に対する４剤併用による術前化学療法 —臨床効果と組織学的効果—
26	○吉野　清美　　戸田　行雄 鳥越　達也　　中島　久美 渡来　潤次　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 74～81	1991. 10	滲出性中耳炎の臨床的検討 —3年以上経過を見た症例—
27	○高橋　馨子　　岩澤　寛 佐藤　成樹　　飯田　順 岡田　智幸　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 82～87	1991. 10	一側内耳障害によるjumbling現象を示した一症例
28	○中島　博昭　　菊地原基敬 大竹　英夫　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 88～92	1991. 10	静脈石を伴った前頸部海綿状血管腫の一例
29	○橋本　久子　　大川　勇 飯田　順　　南　定 釼持　睦　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 93～96	1991. 10	挿管困難であった口腔底類皮様嚢腫の一症例
30	○岩武　博也　　渡来　潤次 飯田　順　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 97～103	1991. 10	急性喉頭蓋炎41例の臨床的観察
31	○上杉　恵介　　加藤　功 岩澤　寛　　佐藤　成樹 赤尾　一郎　　小野泰三郎 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 104～111	1991. 10	橋出血後にoculopalatal myoclonusを示した２症例
32	○越智健太郎　　大橋　徹 佐藤　成樹　　渡来　潤次 竹山　勇　　＊前田　長生 ※関沢　裕人　　＊津田　知宏 ＊猪狩　次郎　　＊片場　嘉明 （＊第１外科） （※第２外科）	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 112～117	1991. 10	腐触性咽頭喉頭食道炎の一再建例
33	○大川　勇　　渡来　潤次 菊地原基敬　　大竹　英夫 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 118～121	1991. 10	当院における副鼻腔原発のadenoido cystic carcinoma４症例の検討
34	○岡田　智幸　　赤城　光代 渡来　潤次　　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 122～127	1991. 10	動静脈瘻を伴った感音性難聴の一症例

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
35	○佐久間　惇　　加藤　　功 荻野　貞雄　　岡田　智幸 竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 128～ 132	1991. 10	上眼瞼向き眼振を示した一症例
36	○鈴木　正彦　　菊地原基敬 越智健太郎　　岩武　博也 渡来　潤次　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 133～ 139	1991. 10	上顎骨線維性骨異形成症の4例
37	○南　　貞　　飯田　　順 竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 140～ 145	1991. 10	口腔底蜂窩織炎14例に関する臨床的考察
38	○荻野　貞雄　　加藤　　功 渡辺　昭司　　高橋　馨子 竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P146～ 150	1991. 10	両側内側縦束症候群の一症例
39	○田沢　　卓　　菊地原基敬 中島　博昭　　赤尾　一郎 森田　紀子　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 151～ 156	1991. 10	左耳介部に発生した動静脈奇形の一症例
40	○星川　智英　　飯田　　順 森田　紀子　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 157～ 160	1991. 10	正中頸部嚢胞13例
41	○渡辺　昭司　　吉野　清美 戸田　行雄　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 161～ 166	1991. 10	伝染性単核球症にひきつづき脳炎を併発したと思われる一症例
42	○赤城　光代　　中島　博昭 岩澤　　寛　　竹山　　勇 ＊高井　憲治　　＊神田　鎌蔵 （＊病害動物）	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 167～ 170	1991. 10	イカ生食による口腔内異物（精子嚢）の一症例
43	○宮坂　良介　　飯田　　順 竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 171～ 174	1991. 10	義歯及び歯牙の気管支異物2症例 ―意識障害下の誤嚥例―
44	○釼持　　睦　　岡田　智幸 岩澤　　寛　　加藤　　功 竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 175～ 179	1991. 10	髄膜炎を併発した原発蝶形骨洞炎
45	○三井　雅夫　　赤尾　一郎 鳥越　達也　　菊地原基敬 飯田　　順　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 180～ 185	1991. 10	前頭洞および篩骨洞に原発した副鼻腔癌腫の2症例
46	○朝倉　美弥　　岩澤　　寛 橋本　久子　　中島　博昭 渡辺　昭司　　菅野　澄雄 釼持　　睦　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 186～ 190	1991. 10	SLEに続発したone-and-a-half症候群の一症例
47	○倉田　文雄　　菊地原基敬 大川　　勇　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 191～ 195	1991. 10	下咽頭、頸部食道摘出後の遊離空腸再建について
48	○鈴木　　毅　　加藤　　功 鳥越　達也　　竹山　　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 196～ 200	1991. 10	舌咽神経痛の一治験例

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年次	研究題目
49	○三保　仁　大橋　徹 越智健太郎　佐藤　成樹 荻野　貞雄　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補48 P. 201～206	1991. 10	先天性内耳奇形の一症例
50	○加藤　功　岡田　智幸 渡辺　昭司　佐藤　成樹 竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補51 P. 10～7	1991. 11	視運動性眼振と関連するラット網膜神経節細胞の分布について
51	○加藤　功　高橋　馨子 渡辺　昭司　中島　博昭 佐藤　成樹　岡田　智幸 佐久間　惇　荻野　貞雄 岩澤　寛　竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	補51 P. 26～30	1991. 11	めまい患者に対するENGの有用性
52	⊛中村　正　＊青柳　優 ＊木村　洋　＊小池　吉郎 加藤　功 （＊山形大耳鼻科）	耳鼻咽喉科臨床	補51 P. 88～94	1991. 11	当科における甲状腺疾患の臨床的検討
53	⊛横田　雅司　＊青柳　優 ＊鈴木　利久　＊木村　洋 ＊中村　正　＊金慶　訓 加藤　功　＊中井　昴 （＊山形大耳鼻科）	耳鼻咽喉科臨床	補51 P. 111～118	1991. 11	顕微鏡下血管減荷術前後の神経耳科学的所見
54	⊛奥村　孝　＊中村　正 ＊金山　亮治　＊原田　浩二 ＊木村　洋　＊小池　吉郎 加藤　功 （＊山形大耳鼻科）	耳鼻咽喉科	補51 P. 173～179	1991. 11	垂直性振子様眼球運動を呈した椎骨脳底動脈瘤の一症例
55	⊛長谷川智彦　＊鈴木　八郎 ＊戸島　均　＊酒井　仁 ＊布施　健生　加藤　功 （＊山形大耳鼻科）	耳鼻咽喉科臨床	補51 P. 236～240	1991. 11	喉頭軟骨腫の一症例
56	○岡田　智幸　加藤　功 岩澤　寛　高橋　馨子 中島　博昭　佐藤　成樹 荻野　貞雄　渡辺　昭司 五十嵐淑晴　竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	50(4) P. 419～422	1991. 12	当科における内リンパ嚢開放術施行例の問題点について
57	○荻野　貞雄　加藤　功 渡辺　昭司　高橋　馨子 竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	50(4) P. 423～428	1991. 12	中心暗点症例の視運動性眼振に関する検討
58	○越智健太郎　大橋　徹 荻野　貞雄　矢崎　裕久 木原　紀子　＊中島　康雄 ※品川　俊人　竹山　勇 （＊放射線科） （※第１病理）	日本耳鼻咽喉科学会会報	84(12) P. 1741～1745	1991. 12	Biopty－Gunによる唾液腺生検の有用性
59	○金山　亮治　加藤　功	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 100～101	1992. 3	視性眼運動検査による脳幹障害の障害部位診断について

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
60	○佐藤　成樹　　加藤　功 渡辺　昭司　　竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 101～103	1992. 3	視運動性眼振に関わる視索核ニューロンの脳幹内投射と橋背外側の役割について
61	⊛内野　善生　　＊今川美登理 ※井須　尚記　　佐久間　惇 （＊東京医大第２生理） （※福井大工学部）	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 104	1992. 3	水平半規管抑制前庭動眼・前庭頸反射弓の神経機構
62	○岡田　智幸　　渡辺　昭司 加藤　功　　竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 114	1992. 3	視索核に投射する網膜神経節細胞の分布について
63	○渡辺　昭司　　加藤　功 佐藤　成樹　　岡田　智幸 竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 114	1992. 3	視運動性眼振の皮膚下経路（第２報）
64	○高橋　馨子　　渡辺　昭司 加藤　功　　竹山　勇 ＊米山　公啓　　＊杉原　浩 ＊加茂　力　　※田所　衛 （＊第２内科） （※第１病理）	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 182	1992. 3	Machado－Joseph病の神経病理学的所見
65	○荻野　貞雄　　岡田　智幸 加藤　功　　岩澤　寛 高橋　馨子　　渡辺　昭司 中島　博昭　　竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 196	1992. 3	めまい効果判定基準（私案）
66	○中島　博昭　　加藤　功 岩澤　寛　　岡田　智幸 荻野　貞雄　　渡辺　昭司 高橋　馨子　　竹山　勇	EQUILIBRIUM RESEARCH	51(1) P. 201	1992. 3	当科における内リンパ嚢開放術症例の検討

学　会　発　表

1	○上杉　恵介	第17回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会定期総会（専門医講習会）		1991. 4	アレルギー性鼻炎の治療の現況
2	○加藤　功　　渡辺　昭司 佐藤　成樹　　岡田　智幸 竹山　勇	第92回日本耳鼻咽喉科学会総会		1991. 5	視運動性眼振の皮質下経路
3	○菅野　澄雄　　＊向井　清 ＊下里　幸男　　＊海老原　敏 竹山　勇 （＊国立がんセンター）	第92回日本耳鼻咽喉科学会総会		1991. 5	大唾液腺癌のc－erbB－2 proteinとその予後について
4	○佐久間　惇　　加藤　功 岩澤　寛　　高橋　馨子 荻野　貞雄　　竹山　勇	第92回日本耳鼻咽喉科学会総会		1991. 5	コンピュータを使用した滑動性眼球運動の定量化システム
5	○矢崎　裕久　　竹山　勇 ＊秋元　義弘　　＊平野　寛 （＊杏林大第２解剖）	第92回日本耳鼻咽喉科学会総会		1991. 5	実験的滲出性中耳炎における耳管中耳粘膜の免疫組織化学的検討

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
6	○大川　勇　加藤　功 飯田　順　菊地原基敬 岩武　博也　竹山　勇 ＊鈴木　八郎 （＊ 山形県中央病院）	第92回日本耳鼻咽喉科学会総会		1991. 5	ビデオ演題：気管に浸潤した甲状腺癌 ―気管端々吻合術―
7	○越智健太郎　木下　裕継 大橋　徹　竹山　勇	第92回日本耳鼻咽喉科学会総会		1991. 5	Ⅱ型コラーゲン感作動物の蝸電図変化　―慢性電極による経時的検討―
8	○岩武　博也　中島　博昭 赤尾　一郎　佐藤　成樹 荻野　貞雄　大橋　徹 竹山　勇	第76回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1991. 6	気管切開をした巨大声帯ポリープの２症例
9	○三井　雅夫　大橋　徹 荻野　貞雄　飯田　順 竹山　勇	第76回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1991. 6	耳下腺部より発生した好酸球性肉芽腫の３症例
10	○高橋　馨子　中島　久美 岡田　智幸　竹山　勇	第14回日本顔面神経研究会		1991. 6	末梢性顔面神経麻痺の予後判定　―多変量解析を用いた予後因子の検討―
11	○竹山　勇	第16回日本耳鼻咽喉科学会　医事問題セミナー		1991. 6	耳鼻咽喉科の救急医療 ―救急処置を必要とする臨床症状―
12	○倉田　文雄　菊地原基敬 大川　勇　鈴木　正彦 田沢　卓　竹山　勇	第15回日本頭頸部腫瘍学会		1991. 6	自験例における下咽頭癌治療の変遷と今後の課題
13	○大川　勇　菊地原基敬 田沢　卓　鈴木　正彦 倉田　文雄　竹山　勇	第15回日本頭頸部腫瘍学会		1991. 6	当科における大唾液腺腫瘍の臨床統計
14	○岡田　智幸　荻野　貞雄 加藤　功　岩澤　寛 高橋　馨子　渡辺　昭司 竹山　勇	日本平衡神経科学会ワークショップ		1991. 6	めまい効果判定基準
15	○大橋　徹　越智健太郎 荻野　貞雄　佐藤　成樹 加藤　功　竹山　勇 ＊小川　武希　※品川　俊人 （＊第２外科） （※第１病理）	第53回耳鼻咽喉科臨床学会		1991. 7	非定型的側頭骨々髄炎の１例
16	○越智健太郎　大橋　徹 荻野　貞雄　矢崎　裕久 木原　紀子　＊中島　康雄 ※品川　俊人　竹山　勇 （＊放射線科） （※第１病理）	第53回耳鼻咽喉科臨床学会		1991. 7	頭頸部領域におけるBiopty－Gunを用いた生検法の有用性について
17	○菅野　澄雄　＊向井　清 ※徳田　安孝　赤尾　一郎 ＊海老原　敏　竹山　勇 （＊国立がんセンター） （※信州大皮膚科）	第53回耳鼻咽喉科臨床学会		1991. 7	大唾液腺癌のProliferating Cell Nuclear Antigen（PCNA）とその予後について

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
18	○岡田　智幸　　加藤　功 ＊田口　芳雄　　釼持　睦 竹山　勇 （＊第２外科）	第21回聖マリアンナ医学会		1991. 7	ビデオ演題：経迷路法による聴神経腫瘍摘出術の経験
19	○漆畑　保　　上杉　恵介 橋本　久子　　星川　智英 木下　裕継　　竹山　勇	第21回聖マリアンナ医学会		1991. 7	鼻アレルギー患者の血中IL－1B，ACTH値
20	○T. Urushibata	5th Workshop Psychoneuro immunomodulation		1991. 7	Serum levels of ACTH, Cortisol and IL－1 of patients with allergic rhinitis
21	○竹山　勇	ラジオたんぱ		1991. 8	ラジオ出演：眼窩疾患シリーズ⑨ ―耳鼻科疾患と眼窩病変―
22	○鳥越　達也　　漆畑　保 石倉　幹雄　　竹山　勇	第31回日本扁桃研究会		1991. 8	扁桃組織における抗原貪食後のマクロファジーの分布と細胞間接着分子（I－CAM1）との関係について
23	○赤尾　一郎　　上杉　恵介 中島　久美　　竹山　勇	第4回日本口腔・咽頭科学会		1991. 8	尋常性疱瘡の３症例
24	○岡田　智幸　　釼持　睦 中島　博昭　　飯田　順 竹山　勇	第77回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1991. 9	突発難聴で発症した小脳橋角部髄膜腫の１症例
25	○宮部　聡　　中島　博昭 釼持　睦　　飯田　順 竹山　勇　　＊高井　憲治 （※病害動物）	第77回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1991. 9	イカ生食による珍しい口腔内異物の２症例
26	○鈴木　正彦	第77回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1991. 9	シンポジウム：画像の有用性画像検査が有用であった症例の経験
27	○中島　久美　　赤尾　一郎 加藤　功　　竹山　勇	第１回日本耳科学会臨床学会		1991. 9	ビデオ演題：有茎側頭筋充填による外耳道後壁再建術
28	○橋本　久子　　上杉恵介 岩澤　寛　　竹山　勇	第30回日本鼻科学会		1991. 9	鼻中隔多形腺腫の２症例
29	○上杉　恵介　　漆畑　保 竹山　勇	第30回日本鼻科学会		1991. 9	スギ花粉症患者における血中ステロイド値とRIST値、RAST値との関係
30	○T. Urushibata K. Uesugi K. Yoshino H. Hoshikawa S. Kai T. Torigoe I. Takeyama	XVI International Congress of Allergology and Clinical Immunology		1991. 10	SERUM LEVELS OF ACTH. CORTISOL AND IL－I OF PATIENTS WITH ALLERGIC RHINTIS

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
31	○K. Uesugi T. Urushibata K. Yoshino H. Hashimoto S. Kai T. Torigoe I. Takeyama	XVI International Congress of Allergology and Clinical Immunology		1991. 10	SERUM LEVELS OF CORTISOL, RIST AND RAST OF PATIENTS WITH ALLERGIC RHINITIS
32	○越智健太郎　木下　裕継 大橋　徹　竹山　勇	第36回日本聴覚医学会		1991. 11	Ⅱ型コラーゲン感作モルモットの蝸電図変化
33	○釼持　睦　荻野　貞雄 吉野　清美　大橋　徹 竹山　勇	第36回日本聴覚医学会		1991. 11	低音障害型メニエール病の蝸電図と前庭機能検査成績
34	○星川　智英　飯田　順 岩武　博也　南　定 竹山　勇	第43回日本気管食道科学会		1991. 11	声帯麻痺の臨床統計的観察
35	○越智健太郎　大橋　徹 佐藤　成樹　渡来　潤次 ＊前田　長生　＊片場　嘉明 竹山　勇 （＊第1外科）	第43回日本気管食道科学会		1991. 11	腐触性咽頭喉頭食道炎の一再建例
36	○荻野　貞雄　大橋　徹 越智健太郎　矢崎　裕久 木原　紀子　倉田　文雄 竹山　勇	第43回日本気管食道科学会		1991. 11	熱傷性気道狭窄症例 —長期stent留置法の経験—
37	○S. Watanabe I. Kato S. Sato T. Okada ＊M. Norita （＊新潟大解剖学）	21th Society for Neuroscience		1991. 11	DESCENDING PATHWAYS FROM THE NUCLEUS OF THE OPTIC TRACT
38	○渡辺　昭司　加藤　功 佐藤　成樹　岡田　智幸 竹山　勇	第50回日本平衡神経科学会		1991. 11	視運動性眼振の皮質下経路第2報
39	○岡田　智幸　渡辺　昭司 加藤　功　竹山　勇	第50回日本平衡神経科学会		1991. 11	視索核に投射する網膜神経節細胞の分布について
40	⊛内野　義生　＊今井美登理 ※井須　尚紀　佐久間　惇 （＊東京医大第2生理） （※福井大工学部）	第50回日本平衡神経科学会		1991. 11	水平半規管系抑制性前庭動眼・前庭頸反射弓の神経機構
41	○高橋　馨子　加藤　功 ＊米山　公啓　＊杉原　浩 ＊加茂　力　※田所　衛 （＊第2内科） （※第1病理）	第50回日本平衡神経科学会		1991. 11	Machado－Joseph病が考えられた疾患の神経病理学的所見
42	○荻野　貞雄　岡田　智幸 加藤　功　岩澤　寛	第50回日本平衡神経科学会		1991. 11	めまい効果判定基準（私案）

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
	高橋　馨子　　渡辺　昭司 中島　博昭　　竹山　　勇				
43	○中島　博昭　　加藤　　功 岩澤　　寛　　岡田　智幸 荻野　貞雄　　渡辺　昭司 高橋　馨子　　竹山　　勇	第50回日本平衡神経科学会		1991. 11	当科における内リンパ嚢開放術症例の検討
44	○佐藤　成樹	第50回日本平衡神経科学会		1991. 12	シンポジウム：脳幹障害の基礎と臨床 視運動性眼振に関わる視索核ニューロンの脳幹内投射と橋背外側核の役割について
45	○鳥越　達也　　菊地原基敬 岩武　博也　　越智健太郎 竹山　　勇　　＊小池　　満 ※高桑　俊文 （＊第１内科） （※第２病理）	第78回日本耳鼻咽喉科学会 神奈川県地方部会		1991. 12	鼻・副鼻腔原発の悪性リンパ腫３症例
46	○小松崎　靖　　吉野　清美 菊地原基敬　　飯田　　順 竹山　　勇　　＊田所　　衛 （＊第１病理）	第78回日本耳鼻咽喉科学会 神奈川県地方部会		1991. 12	血管線維腫の２症例
47	○上杉　恵介　　加藤　　功 釼持　　睦　　岡田　智幸 中島　博昭　　竹山　　勇	第22回聖マリアンナ医学会		1991. 12	ビデオ演題：メニエール病に対する手術療法
48	○竹山　　勇	川崎市消防局救急隊員専門研修		1991. 12	演題：鼻出血とめまい
49	○菊地原基敬	川崎市消防局救急隊員専門研修		1991. 12	演題：鼻出血とめまい
50	○K. Ochi　　T. Ohashi S. Ogino　　H. Yazaki N. Kihara　　＊Y. Nakajima ※T. Shinagawa　　I. Takeyama （＊放射線科） （※第１病理）	The 7th Asia－Oceania Congress of Otorhinilaryngological Society		1991. 12	BIOPSY OF HEAD NECK LESIONS WITH A BIOPTY BIOPSY INSTRUMENT
51	○I. Kato J. Iida I. Okawa H. Iwatake I. Takeyama	The 7th Asia－Oceania Congress of Otorhinilaryngological Society		1991. 12	ビデオ演題：END TO END ANASTOMOSIS OF TRACHEA IN THYROID CANCER WITH TRACHEAL INVASION
52	○S. Ogino　　T. Ohashi K. Ochi　　H. Yazaki I. Takeyama	The 7th Asia－Oceania Congress of Otorhinilaryn－gological Society			LONG TERM STENTING IN LAYNGO TRACHEAL STENOSIS IN A PATIENT WITH THERMAL BURNS OF UPPER AIRWAY

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
53	○竹山　勇	NHK きょうの健康		1992. 1	テレビ出演：声帯のポリープ
54	○竹山　勇	NHK きょうの健康		1992. 1	テレビ出演：喉頭がん
55	○星川　智英　上杉　恵介 勝見　直樹　菊地原基敬 竹山　勇	第2回日本頭頸部外科学会		1992. 1	喉頭摘出が奏功した重症肺気腫を伴った高齢者の喉頭癌症例
56	○岩武　博也　加藤　功 飯田　順　竹山　勇 ＊江並　朝猛　＊平　秦彦 ＊中田幸之介 （＊第3外科）	第2回日本頭頸部外科学会		1992. 1	Tチューブを要した喉頭、気管狭窄の3症例
57	○越智健太郎　荻野　貞雄 矢崎　裕久　宮部　聡 三井　雅夫　木原　紀子 ＊品川　俊人　大橋　徹 竹山　勇 （＊第1病理）	第2回日本頭頸部外科学会		1992. 1	頸部神経鞘腫2症例 ―術前診断および治療について―
58	○荻野　貞雄　大橋　徹 越智健太郎　矢崎　裕久 三井　雅夫　木原　紀子 宮部　聡　竹山　勇	第2回日本頭頸部外科学会		1992. 1	巨大甲状腺悪性リンパ腫症例
59	○木下　裕継　＊相川　通 ＊大谷　巌 （＊福島医大耳鼻科）	第1回耳科学会基礎学会		1992. 2	髄膜炎の内耳波及に関する側頭骨病理所見
60	○三保　仁　＊方波見卓行 ＊深沢　学　＊山本　雅庸 ＊湯浅　英樹　＊明石　勝也 ＊芦川　和高 （＊救命センター）	第32回日本救命学会地方会		1992. 2	壊疽性胆嚢炎、大網膿瘍を併発した気管支喘息重積発作の一例
61	○加藤　功	第14回山陽めまい平衡障害懇話会		1992. 2	視性眼運動による脳幹障害のマッピング
62	○上杉　恵介　加藤　功 釼持　睦　岡田　智幸 中島　博昭　竹山　勇	第79回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 3	ビデオ演題：メニエール病に対する手術療法
63	○赤尾　一郎　小松崎　靖 菊地原基敬　竹山　勇	第79回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 3	invasive pituitary adenomaの1例
64	○漆畑　保　上杉　恵介 吉野　清美　三保　仁 竹山　勇	第3回ACTH研究会		1992. 3	鼻アレルギー患者における炎症調節機構因子の検討
65	○佐久間　惇　加藤　功 岩澤　寛　高橋　馨子 中島　博昭　荻野　貞雄 竹山　勇	第8回情報処理研究会		1992. 3	コンピューターを使用した滑動性眼球運動の定量化システム

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
66	○上杉　恵介　　漆畑　保 鳥越　達也　　三保　仁 竹山　勇	第10回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会		1992. 3	鼻アレルギー患者の鼻粘膜における免疫組織学的検討

平成四年度教室業績集

著　書

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
1	○竹山　勇	今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針 (医学書院)		1992. 6. 25	C. 鼻・副鼻腔・顔面の治療 鼻腔異物　P. 259～261 鼻石　P. 261～262
2	○竹山　勇	必携・耳鼻咽喉科学 (克誠堂出版)		1993. 2. 10	B. 主要症候とその病態生理 1. めまい　P. 47～51 12. 鼻閉　P. 70～71 13. 鼻汁　P. 71～72 14. くしゃみ　P. 72～73 15. 嗅覚異常　P. 73～74 16. いびき　P. 74～75 17. 鼻出血　P. 75～76 18. 咽頭痛　P. 76～78
3	○竹山　勇	今日の治療指針 1993 —私はこう治療している— (医学書院)	P. 773～774	1993. 3. 15	26. 耳鼻咽喉疾患 めまい・平衡障害 P. 773～774

誌上発表

1	○越智健太郎　大橋　徹 荻野　貞雄　矢崎　裕久 木原　紀子　三井　雅夫 竹山　勇	日本耳鼻咽喉科学会会報	95(4) P. 551～555	1992. 4	頭頸部領域における Biopty－Gun を用いた生検法の有用性
2	○I. Kato　T. Okada S. Watanabe　S. Sato T. Urushibata　I. Takeyama	Acta Otolaryngol	112(3) P. 421～428	1992. 5	Retinal Ganglion Cells Related to Optokinetic Nystagmus in the Rat
3	○竹山　勇	耳鼻咽喉科臨床	85(6) P. 1016～1017	1992. 6	浅側頭動脈動注法のコツ
4	㊟奥田　稔　竹山　勇 渡来　潤次 他77名 (＊日本医大耳鼻科)	耳鼻と臨床	38 Suppl 1 P. 310～332	1992. 6	Fluticasone propionate エアゾール剤の臨床的検討（第2報）—通年性鼻アレルギーに対する至適用量の検討—
5	㊟奥田　稔　竹山　勇 上杉　恵介 他115名 (＊日本医大耳鼻科)	耳鼻と臨床	38 Suppl 1 P. 333～348	1992. 6	Fluticasone propionate エアゾール剤の臨床的検討（第3報）—血管運動性鼻炎に関する試験—

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
6	⊛奥田　稔　竹山　勇 上杉　恵介 他116名 （＊日本医大耳鼻科）	耳鼻と臨床	38 Suppl 1 P. 349～ 366	1992. 6	Fluticasone propionateエアゾール剤の臨床的検討（第4報）—通年性鼻アレルギーに対する長期投与試験—
7	⊛佐々木好久　竹山　勇 上杉　恵介 他85名 （＊日本医大耳鼻科）	耳鼻と臨床	38 Suppl 1 P. 384～ 403	1992. 6	Fluticasone propionateエアゾール剤の臨床的検討（第6報）—通年性鼻アレルギーに対するBeclomethasone dipropionateとの二重盲検比較試験—
8	⊛奥田　稔　竹山　勇 上杉　恵介 他121名 （＊日本医大耳鼻科）	耳鼻と臨床	38 Suppl 1 P. 431～ 457	1992. 6	Fluticasone propionate点鼻液の臨床的検討（第2報）—通年性鼻アレルギーに対する至適用法・用量の検討—
9	○上杉　恵介	聖マリアンナ医科大学雑誌	20(3) P. 97～111	1992. 6	担癌生体の血漿蛋白および組織蛋白の動態に関する研究—二次元電気泳動法（O'Farrell法）を用いた分析—
10	○竹山　勇	クリニシアン	39(412) P. 629～ 630	1992. 7	成人のくりかえす扁桃炎の手術適応
11	○竹山　勇	はつらつ	14(7) P. 26	1992. 7	健康相談室
12	○矢崎　裕久	聖マリアンナ医科大学雑誌	20(4) P. 824～ 832	1992. 8	実験的滲出性中耳炎における耳管鼓室口粘膜の微細構造
13	○S. Sugano　＊K. Mukai ＊S. Hirohashi　＊H. Tsuda ＊S. Furuya ＊Y. Shimosato　＊S. Ebihara I. Takeyama （＊国立がんセンター）	LARYNGOSCOPE	102(8) P. 923～ 927	1992. 8	Immunohistochemical Study of c－erbB－2 Oncoprotein Overexpression in Human Major Salivary Gland Carcincma : An Indicator of Aggressiveness
14	○朝倉　美弥　竹山　勇	耳鼻咽喉科・頭頸部外科症候群事典（医学書院）	64(11) P. 115～ 116	1992. 10	One and a half症候群
15	○竹山　勇	慶耳会会報 THE PENORL	47 P. 48	1993. 1	忘れられない咽喉頭異常感症の一例
16	⊛新川　敦　竹山　勇 中島　博昭　中島　久美 越智健太郎　荻野　貞雄 矢崎　裕久 （＊東海大耳鼻科）	耳鼻と臨床	39(2) P143～ 151	1993. 3	耳鼻咽喉科領域感染症に対するAztreonam（AZT）の臨床的検討
17	○竹山　勇	月刊ヘルシートーク	3 P. 12～14	1993. 3	鼻中隔弯曲症

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
18	○岩武　博也　　加藤　功 飯田　順　　竹山　勇 ＊江並　朝猛　＊平　泰彦 ＊中田幸之介 （＊第３外科）	頭頸部外科	2 P. 141～ 145	1992.	Ｔチューブを要した喉頭、気管狭窄の３症例
19	○漆畑　保　　上杉　恵介 吉野　清美　　橋本　久子 三保　仁　　竹山　勇	ACTH RELATED PEPTIDES	3 P. 111～ 116	1992.	鼻アレルギー患者における炎症調節機構因子の検討 ―血中値ACTHおよびサイトカイニン値―

学　会　発　表

1	○荻野　貞雄　　加藤　功 岡田　智幸　　岩澤　寛 中島　博昭　　高橋　馨子 渡辺　昭司　　竹山　勇	日本平衡神経科学会 第２回めまいに対する治療効果判定基準（案）の作成に関するワークショップ		1992. 4. 25	めまい効果判定基準
2	○渡辺　昭司　　加藤　功 佐藤　成樹　　岡田　智幸 竹山　勇	第93回日本耳鼻咽喉科学会総会		1992. 5. 14～17	視運動性眼振の皮質下経路
3	○岩武　博也　　飯田　順 南　定　　星川　智英 竹山　勇	第93回日本耳鼻咽喉科学会総会		1992. 5. 14～17	一側性声帯麻痺に対する経皮的シリコン注入術
4	○堤　康一朗　　赤尾　一郎 星川　智英　　竹山　勇	第93回日本耳鼻咽喉科学会総会		1992. 5. 14～17	ヒトパピローマウイルス（HPV）のヒト上皮細胞癌化における役割
5	○岡田　智幸　　中島　博昭 竹山　勇　＊澤木　修二 （＊横浜市大）	第93回日本耳鼻咽喉科学会総会		1992. 5. 14～17	塩酸ビフェメランの長期投与によるめまい、感音難聴、耳鳴に対する治療効果の検討
6	○越智健太郎　　大橋　徹 荻野　貞雄　　矢崎　裕久 宮部　聡　　竹山　勇	第93回日本耳鼻咽喉科学会総会		1992. 5. 14～17	画像ガイドによるBiopty－Gunによる針生検法
7	○K. Takahashi　I. Kato S. Watanabe　I. Takeyama ＊K. Yoneyama　＊H. Sugihara ※M. Tadokoro （＊第２内科） （※第１病理）	第17回バラニー学会		1992. 6. 1～5	A CLINICOPATHOLOGICAL STUDY OF AUTOPSY CASE WITH PROBABLE MACHADOJOSEPH DISEASE IN JAPAN
8	○S. Ogino　I. Kato K. Takahashi　S. Watanabe I. Takeyama	第17回バラニー学会		1992. 6. 1～5	ROLE OF CENTRAL AND PERIPHERAL RETINAL LESIONS ON OPTOKINETIC NYSTAGMUS AND SMOOTH PURSUIT EYE MOVEMENTS
9	○三井　雅夫　　岩武　博也 飯田　順　　竹山　勇	第80回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 6. 13	外耳道色素性母斑の１症例

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
10	○荻野　貞雄　加藤　功 岩澤　寛　高橋　馨子 佐久間　惇　渡辺　昭司 竹山　勇	第80回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 6.13	サーチコイルを使用した眼球運動記録
11	○大橋　徹　吉野　清美 越智健太郎　釼持　睦 木下　裕継　竹山　勇	第80回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 6.13	小脳橋角部腫瘍の蝸電図 —術前・術後波形変化の検討—
12	○岩澤　寛	第80回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 6.13	日常診療におけるコツ —めまいの問診のとりかた—
13	○竹山　勇　堤　康一朗 赤尾　一郎　菅野　澄雄 鈴木　毅　星川　智英	第34回日本耳鼻咽喉科学会新潟県地方部会		1992. 6.14	HPVによるヒト上皮細胞に対する発癌への過程
14	○竹山　勇	川崎市宮前区ロータリー		1992. 6.16	嗄声について
15	○鈴木　正彦　倉田　文雄 田沢　卓　赤尾　一郎 菊地原基敬　竹山　勇	第16回日本頭頸部腫瘍学会		1992. 6.26～27	頭頸部扁平上皮癌に対するCDDP・PEP・THP－ADM併用療法
16	○田沢　卓　赤尾　一郎 鈴木　正彦　菊地原基敬 竹山　勇	第16回日本頭頸部腫瘍学会		1992. 6.26～27	頭頸部扁平上皮癌の遠隔転移 —特にガリウム、骨シンチグラフィの有用性について—
17	○矢崎　裕久　三井　雅夫 荻野　貞雄　越智健太郎 大橋　徹　竹山　勇	第16回日本頭頸部腫瘍学会		1992. 6.26～27	頭蓋内浸潤をきたした嗅神経芽細胞腫の1症例
18	○倉田　文雄　菊地原基敬 鈴木　正彦　鈴木　毅 田沢　卓　竹山　勇	第16回日本頭頸部腫瘍学会		1992. 6.26～27	当科における過去15年間の上咽頭腫瘍の検討
19	○中島　久美　岩澤　寛 菊地原基敬　高橋　馨子 中島　博昭　岡田　智幸 岩武　博也　佐藤　成樹 竹山　勇	第54回耳鼻咽喉科臨床学会		1992. 7.10～11	突発性難聴におけるノイトロピンの臨床効果の検討 —ステロイドとの比較—
20	○赤尾　一郎　小松崎　靖 菊地原基敬　竹山　勇	第54回耳鼻咽喉科臨床学会		1992. 7.10～11	眼球突出を主訴とした異所性下垂体腺腫の1症例
21	○鳥越　達也　加藤　功 鈴木　毅　釼持　睦 竹山　勇	第54回耳鼻咽喉科臨床学会		1992. 7.10～11	口腔咽頭法による舌咽神経切除術を施行した舌咽神経痛の2症例
22	○高橋　馨子　加藤　功 岡田　智幸　荻野　貞雄 佐久間　惇　渡辺　昭司 岩澤　寛　中島　博昭 竹山　勇	第3回耳鼻咽喉科と老化の研究会		1992. 7.17	Open loop conditionによる追跡眼球運動と加齢について

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
23	○K. Ochi　H. Kinoshita M. Kenmochi　K. Yoshino T. Ohashi　I. Takeyama	第21回国際聴覚医学会		1992. 8. 31～ 9. 4	Electrocochleographic study in an experimental animal model with various cochlear impairments
24	○K. Tsutsumi　I. Takeyama ＊Q. Sun　＊M. M. Pater ＊A. Pater　※Y. Kikuchi ※S. Yasumoto （＊メモリアル大学） （※国立がんセンター）	第11回国際パピローマウイルスワークショップ		1992. 9. 5～ 12	Enhanced fibronectin synthesis associated with abberant squamous differentiation of HPV 16 immortalized human Keratinocyte cell lines
25	○T. Okada　I. Kato ＊Y. Taguchi　I. Takeyama （＊第2外科）	第4回国際真珠腫学会		1992. 9. 8～ 12	Middle cranial fossa appproach for the cholesteatoma of the right pertrous bone
26	○I. Akao　K. Nakajima I. Kato　I. Takeyama	第4回国際真珠腫学会		1992. 9. 8～ 12	Clinical evaluation of middle ear cholesteatomas
27	○南　定　星川　智英 岩武　博也　飯田　順 竹山　勇	第81回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 9. 12	当教室最近10年間のPTP食道異物の臨床統計的観察
28	○菅野　澄雄　中島　博昭 岩武　博也　竹山　勇 ＊田所　衛 （＊第1病理）	第81回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 9. 12	頸腺結核症例について
29	○竹山　勇	第12回聖マリアンナ医科大学公開講座		1992. 9. 17	アレルギー性鼻炎
30	○T. Ohashi　K. Ochi H. Kinoshita　M. Kenmochi I. Takeyama	INTERNATIONAL CONFERENCE ON EcoG, OAE AND INTRAOPERATIVE MONITORING		1992. 9. 20～ 24	Electrocochleograhy in the cerebellopontine angle tumors —postoperative changes in waveforms—
31	○K. Ochi　T. Ohashi H. Kinoshita　M. Kenmochi I. Takeyama	NTERNATIONAL CONFERENCE ON EcoG, OAE AND INTRAOPERATIVE MONITORING		1992. 9. 20～ 24	CAP tuning Curves in guniea pigs with various cochlear impairment
32	○H. Kinoshita　T. Ohashi K. Ochi　M. Kenmochi I. Takeyama	NTERNATIONAL CONFERENCE ON EcoG, OAE AND INTRAOPERATIVE MONITORING		1992. 9. 20～ 24	Electrocochleography and auditory brainstem response in almost or totally deaf patients
33	○M. Kenmochi　T. Ohashi K. Ochi　H. Kinoshita I. Takeyama	NTERNATIONAL CONFERENCE ON EcoG, OAE AND INTRAOPERATIVE MONITORING		1992. 9. 20～ 24	Electrocochleographic study in animals with experimental chronic renal failure —some experimental findings—

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
34	○勝見　直樹　菊地原基敬 菅野　澄雄　飯田　順 竹山　勇	第5回日本口腔・咽頭科学会		1992. 9.25～26	軟口蓋に発生したmonomorphic adenomaの1例
35	○三井　雅夫　菊地原基敬 荻野　貞雄　大橋　徹 竹山　勇	第5回日本口腔・咽頭科学会		1992. 9.25～26	耳下腺部より発生した好酸球性肉芽腫
36	○中島　博昭　中島　久美 南　定　赤尾　一郎 竹山　勇	第5回日本口腔・咽頭科学会		1992. 9.25～26	口腔・咽頭病変におけるMRI
37	○三保　仁　漆畑　保 上杉　恵介　竹山　勇	第31回日本鼻科学会		1992. 10.1～3	スギ花粉症患者における血中RIST値、RAST値、ACTH値、コルチゾール値と1L－1との関係
38	○上杉　恵介　三保　仁 鳥越　達也　竹山　勇	第31回日本鼻科学会		1992. 10.1～3	抗アレルギー剤の内服と局所点鼻との効果検討 ―予防投与と症状悪化例の治療効果―
39	○南　定　星川　智英 岩武　博也　飯田　順 竹山　勇	第44回日本気管食道科学会		1992. 10.23～24	当教室最近10年間のPTP食道異物の臨床統計的観察
40	○漆畑　保　上杉　恵介 吉野　清美　三保　仁 竹山　勇	第42回日本アレルギー学会		1992. 10.28～30	杉花粉症患者における炎症調節因子の検討 ―血中ACT及びサイトカイニン値―
41	○上杉　恵介　漆畑　保 三保　仁　竹山　勇	第42回日本アレルギー学会		1992. 10.28～30	スギ花粉症患者における血清サイトカイニン値の検討
42	○荻野　貞雄　加藤　功 佐久間　惇　高橋　馨子 岩澤　寛　渡辺　昭司 竹山　勇	第51回日本平衡神経科学会		1992. 11.5～7	サーチコイルシステムによる眼球運動記録
43	○岡田　智幸　加藤　功 佐藤　成樹　渡辺　昭司	第51回日本平衡神経科学会		1992. 11.5～7	視索核に投射する網膜神経細胞の分布について
44	○加藤　功　中島　博昭 竹山　勇	第51回日本平衡神経科学会		1992. 11.5～7	視索核破壊によるOKN緩徐増加とOKANへの影響について
45	○佐久間　惇　加藤　功 岩澤　寛　高橋　馨子 荻野　貞雄　竹山　勇	第51回日本平衡神経科学会		1992. 11.5～7	STEP－RAMP刺激による滑動性眼球運動の分析 ―刺激方法と潜時との関係―
46	○高橋　馨子　加藤　功 岡田　智幸　岩澤　寛 佐久間　惇　渡辺　昭司 岩澤　寛　中島　博昭 竹山　勇	第51回日本平衡神経科学会		1992. 11.5～7	OPEN LOOP CONDITIONにおける加齢変化について

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
47	○渡辺　昭司　　加藤　　功 佐藤　成樹　　岡田　智幸 竹山　　勇	第51回日本平衡神経科学会		1992. 11.5～7	両側視策核間の交連線維切断による視運動性眼振への影響について
48	○高橋　馨子　　加藤　　功 岡田　智幸　　荻野　貞雄 佐久間　惇　　渡辺　昭司 岩澤　　寛　　中島　博昭 竹山　　勇	第24回聖マリアンナ医学会		1992. 12.5	Open loop conditionによる追跡眼球運動と加齢について
49	⊛北　　政彦　　＊小池　　満 ※下條　貞友　　赤尾　一郎 竹山　　勇 （＊第1内科） （※難病治療研究センター）	第123回日本神経学会 関東地方会		1992. 12.12	可逆性シスプラチン皮質盲の1症例
50	○赤尾　一郎　　加藤　　功 竹山　　勇	第82回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 12.12	下方注視麻痺を示した中脳梗塞の1症例
51	○渡辺　昭司　　岩澤　　寛 釼持　　睦　　坂本　園子 木下　裕継　　竹山　　勇	第82回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1992. 12.12	鼻性頭蓋内合併症
52	○加藤　　功　　岩澤　　寛 佐久間　惇　　岡田　智幸 荻野　貞雄　　竹山　　勇	第2回小児と高齢者の平衡機能研究会		1992. 12.18	追跡眼球運動と加齢について
53	○岩武　博也　　加藤　　功 ＊鈴木　八郎　　竹山　　勇 （＊山形中央病院）	第3回日本頭頸部外科学会		1993. 1.21～22	気管外傷に対する気管端々吻合術
54	○鈴木　正彦　　菊地原基敬 岡田　智幸　　竹山　　勇	第3回日本頭頸部外科学会		1993. 1.21～22	当科における聴器癌症例の検討
55	○南　　定　　菊地原基敬 鈴木　正彦　　中島　博昭 竹山　　勇	第3回日本頭頸部外科学会		1993. 1.21～22	巨大な口腔底嚢胞の1例
56	○竹山　　勇	新潟大学医学部学士会 東京支部総会		1993. 1.30	発癌のﾌﾟﾛｾｽ ―喉頭癌について―
57	○岩武　博也　　加藤　　功 菅野　澄雄　　深水　和子 竹山　　勇	第83回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 3.6	輪状軟骨の多発性骨折を呈した1症例
58	○深水　和子　　赤尾　一郎 竹山　　勇	第83回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 3.6	Sweet病の合併が疑われたMCTDの1症例
59	○堤　康一朗	第5回日本喉頭科学会		1993. 3.19～20	咽頭癌組織診断の現状と問題点 ―間質反応からみた腫瘍活性―
60	○岩武　博也　　南　　定 星川　智英　　飯田　　順	第5回日本喉頭科学会		1993. 3.19～20	声帯麻痺から原疾患を診断し得た症例について

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
	竹山　勇				
61	○南　定　赤尾　一郎 上杉　恵介　菊地原基敬 竹山　勇	第5回日本咽頭科学会		1993. 3.19～20	気管切開を要した巨大喉頭蓋嚢胞の2症例
62	○上杉　恵介　鳥越　達也 三保　仁　竹山　勇	第11回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会		1993. 3.26～27	スギ花粉症に対するケトチフェン点鼻薬の治療効果
63	○漆畑　保　吉野　清美 久保田成美　橋本　久子 上杉　恵介　竹山　勇	第4回ACTH研究会		1993. 3.27	アレルギー患者のACTH及び1L－1ra値の検討

平成五年度教室業績集

著　書

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
1	○Kenmochi. M Ohashi. T Kinoshita. H Takeyama. I	ECog, OAE and Intraoperative Monitoring (kugler)	P. 45～48	1993.	Electrocochleographic study in animals with experimental chronic renal insufficiency
2	○Ohashi. T Ochi. K Kinoshita. H Kenmochi. M Takeyama. I	ECog, OAE and Intraoperative Monitoring (kugler)	P. 79～84	1993.	Electrococlegraphy of cerebellopontine angle tumors : postoperative changes in response waveform
3	○Ochi. K Kinoshita. H Kenmochi. M Ohashi. T Takeyama. I	ECog, OAE and Intraoperative Monitoring (kugler)	P. 85～89	1993.	Compound action potential tuning curves in guinea pigs with various cochler impairments
4	○Kinoshita. H Ohashi. T Kenmochi. M Takeyama. I	ECog, OAE and Intraoperative Monitoring (kugler)	P. 90～95	1993.	Electrocochleogram and auditory brainstem response in almost or totally deaf patients
5	○Okada. T Kato. I ＊Taguchi. Y Takeyama. I (＊第2外科)	Cholesteatoma and Mastoid Surgery (Kugler)	P. 499～505	1993.	Middle cranial fossa approach for cholesteatoma of the right petrous bone
6	○Akao. I Nakajima. K Kato. I Takeyama. I	Cholesteatoma and Mastoid Surgery (Kugler)	P. 701～704	1993.	Clinical evaluation of middle ear cholesteatomas

誌 上 発 表

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
1	○菅野　澄雄	聖マリアンナ医科大学雑誌	Vol. 21 No. 2 P. 219～228	1993. 4	大唾液腺癌におけるc－erbB－2蛋白の発現の有無と病理組織、進行度および患者の予後との相関関係に関する研究
2	○赤尾　一郎	聖マリアンナ医科大学雑誌	Vol. 21 No. 2 P. 229～234	1993. 4	上咽頭癌におけるEpstein－Barr Virusの検出率とその臨床病理学的意義 —分子生物学的検討—
3	○竹山　勇　　漆畑　保 堤　康一朗	喉頭	Vol. 5 No. 1 P. 6～11	1993. 6	喉頭組織の男性ホルモンとの関わり
4	○三保　仁　　＊方波見卓行 ※山本　雅樹　　△深沢　学 ◎湯浅　英樹　　◎赤石　勝也 ◎芦川　和高　　竹山　勇 （＊第3内科） （※第2内科） （△第1内科） （◎救命救急センター）	聖マリアンナ医科大学雑誌	Vol. 21 No. 3 P. 458～464	1993. 6	黄色ブドウ球菌敗血症より壊疽性胆嚢炎、大網膿瘍を併発した気管支喘息重積発作の1症例
5	○加藤　功	Medical Practice	10 P. 1415～1418	1993. 8	めまいと聴覚障害 —メニエール病と周辺疾患との鑑別—
6	○菅野　澄雄　　中島　博昭 岩武　博也　　竹山　勇 ＊田所　衛 （第1病理）	耳鼻咽喉科臨床	Vol. 186 No. 9 P. 1297～1302	1993. 9	結核性頸部リンパ節炎の4症例
7	○加藤　功　　渡辺　昭司 中島　博昭　　竹山　勇 ＊長谷川智彦 （＊山形大耳鼻科）	Equilibrium Research	Vol. 52 No. 3 P. 474～478	1993. 9	視索核破壊のOKN2成分への影響
8	○Kouichiro Tsutsumi ＊Qi Sun ※Shigeru Yasumoto ※Keiji Kikuchi ※Yujiro Ohta ＊Alan Pater ＊Mary M. Pater （＊カナダメモリアル大学） （※神奈川がんセンター）	Amarican Journal of Pathology	Vol. 143 No. 4 P. 1150～1158	1993. 10	In Vitro and Vivo Analysis of Cellular Origin of Cervical Squamous Metaplasia
9	○Watanabe. S Kato. I Sato. S Takeyama. I ＊Norita. M （＊新潟大）	Soc. Neurosci	17 P. 113	1993. 11	Middle－line lesion in the pretetectum in the monkey : effects on the optokinetic system
10	○堤　康一朗　　鈴木　毅 岩武　博也　　星川　智英	喉頭	Vol. 5 No. 2	1993. 12	声門上癌間質における基底膜構成成分の発見

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
	赤尾　一郎　　菅野　澄雄 竹山　　勇		P. 97～ 101		―p53蛋白腫瘍細胞核内蓄積及びヒトパピローマウイルス16型感染との関係―
11	○岡田　智幸　　加藤　　功 渡辺　昭司　　佐藤　成樹 竹山　　勇	Equilibrium Research	Vol. 52 No. 4 P. 496～ 503	1993. 12	視運動性眼振と関連する網膜神経節細胞の分布について
12	○Yokoyama. M Tsutsumi. K ＊Pater. A ＊Pater. M （＊カナダメモリアル大学）	OBSTETRICS & GYNECOLOGY	Vol. 83 No. 2 P. 197～ 204	1994. 2	Human Papillomavirus 18 – Immortalized Endocervical Cells With In Vitro Cytokeratin Expression Characteristics of Adenocarcinoma
13	○Sugano. S Urushibata. T Takeyama. I	Acta Oto – laryngologica	Supple. 506 P. 80～84	1993.	Immunohistochemical Study and an Electron Microscopic Observation of the Nucleus of the Optic Tract in the Rat
14	⊛中島　　孝　　※設楽　公一 鈴木　　毅 （＊群馬大第２病理） （※群馬大耳鼻科）	CRC	Vol. 2 No. 3 Autumn P. 568～574	1993.	基礎特集HPV感染とがん HPV感染と腫瘍 4.頭頸部領域腫瘍
15	○Kato. I Sato. S Watanabe. S Nakashima. H Takeyama. I Watanabe. Y	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple. 504 P. 7～12	1993.	Role of the dorsolateral pontine nucleus in two components of optokinetic nystagmus (OKN)
16	○Watanabe. S　　Kato. I Sato. s　　＊Norita. M （＊新潟大）	Neuroscience Research	Vol. 17 P. 325～ 329	1993.	Direct Projection from the nucleus of the optic tract to the medial vestibular nucleus in the cat
17	○加藤　　功	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	Vol. 65 P. 123～ 127	1993.	耳鼻咽喉科の機能検査マニュアル 2.平衡機能検査 〔5〕サーチコイルによる眼球運動記録
18	⊛Qi Sun Kouichiro Tsutsumi ＊Masatoshi Yokoyama ＊Mary M. Pater ＊Alan Pater （＊カナダメモリアル大学）	International Journal of Cancer	Vol. 54 P. 656～ 665	1993.	In Vivo Cytokeration – Expression Pattern Pattern of Stratified Squamous Epithelium from Human Papillomavirus – Type – 16 – Immortalized Ectocervical and Foreskin Keratinocytes
19	○越智健太郎　　木下　裕継 釼持　　睦　　吉野　清美 大橋　　徹　　竹山　　勇	Audiology Japan	Vol. 36 P. 772～ 776	1993.	モルモットにおける蝸電図用慢性電極法の開発 ―簡便法について―

	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
20	○越智健太郎　荻野　貞雄 深水　和子　矢崎　裕久 大橋　徹　竹山　勇 ＊蘆田　浩 （＊放射線科）	耳鼻咽喉科臨床	Vol. 87 No. 3 P. 379～384	1994. 3	ドレナージカテーテル有効の頸部膿瘍例
21	⊛Yokota. M　＊Aoyagi. M Kato. I　＊Koik. Y （＊山形大）	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 47～51	1994.	Postoperative changes in the contralateral auditory brainstem response after microvascular decompression in cases of trigeminal neuralgia
22	○Kato. I　＊Nakamura. I ＊Kanayama. R　＊Aoyagi. M （＊山形大）	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 95～98	1994.	Slow saccades and quick phases of nystagmus after pontine lesions
23	○Kato. I　＊Ishikawa. M ＊Nakamura. T　＊Watanabe. T ＊Harada. K　＊Kanayama. R ＊Aoyagi. M　＊Koike. Y （＊山形大）	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 99～103	1994.	Quantitative assessment of influence of aging on optokinetic nystagmus
24	⊛Nakamura. T　＊Kanayama. R ＊Aoyagi. M　Kato. I ＊Koike. Y （＊山形大）	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 109～113	1994.	Computer analysis for routine electronystagmo-graphy test
25	⊛Watanebe. J　Kato. I ＊Aoyagi. M　＊Nakamura. T ＊Harada. K （＊山形大）	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 114～119	1994.	Reboud positional nystagmus as a peripheral origin
26	⊛Harada. K　Kato. I ＊Nakamura. T　＊Koike. Y （＊山形大）	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 120～125	1994.	Role of the prepositus hypoglossi nucleus on primary position upbeat nystagmus
27	⊛Hasegawa. T　Kato.I ＊Harada. K　＊Igarashi. T ＊Yoshida. M　＊Koike. Y	Acta Otolaryngol (Stockh)	Supple 511 P. 126～130	1994.	The effect of uvulonodular lesions on horizontal optokinetic nystagmus and optokinetic after nystagus in cats

学　会　発　表

1	○堤　康一朗　鈴木　毅 ＊安本　茂　竹山　勇 （＊神奈川県立がんセンター分子腫瘍部）	第94回日本耳鼻咽喉科学会総会		1993. 5. 27～29	HPV－16型で形質転換したヒトケラチノサイトのFibronectin産生（ポスター）
2	○岩武　博也　加藤　功 飯田　順　竹山　勇 ＊井口　正男 （＊長岡日赤）	第94回日本耳鼻咽喉科学会総会		1993. 5. 27～29	声門下狭窄に対する観血的治療法（ポスター）

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
3	○渡辺昭司　加藤　功 高橋　馨子　佐藤　成樹 岡田　智幸　中島　博昭 竹山　勇	第94回日本耳鼻咽喉科学会総会		1993. 5.27～29	メニエール病に対するゲンタシン鼓室内注入例の検討（ポスター）
4	○中島　久美　岩澤　寛 中島　博昭　上杉　恵介 佐藤　成樹　大川　勇 朝倉　美弥　竹山　勇	第16回日本顔面神経研究会		1993. 6.3～4	顔面神経麻痺に対するメチルプレドニゾロンの臨床効果の検討
5	○菅野　澄雄　加藤　功 中島　久美　佐久間　惇 南　定　竹山　勇	第84回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 6.12	イヤーモルドによる外耳道異物の1例
6	○勝見　直樹　赤尾　一郎 倉田　文雄　田沢　卓 鈴木　正彦　菊地原基敬 竹山　勇	第84回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 6.12	可逆性シスプラチン皮質盲の1症例
7	⊛黒田　一　＊朝比奈紀彦 ＊難波　玄　＊高野　信也 ＊加藤　昌樹　＊調所　廣之 岩澤　寛　朝倉　美弥 ※石塚　洋一　△稲葉　貢 ◎土井　健司 （＊関東労災病院） （※帝京大学溝口病院） （△日本医大第2病院） （◎高津中央病院）	第84回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 6.12	顔面神経麻痺（ベル麻痺）の発症日の統計的検討（第2報）
8	○金子　卓爾　赤尾　一郎 竹山　勇　＊有福　孝徳 ＊片山　憲侍 （＊第1外科）	第749回外科集談会		1993. 6.17	下咽頭癌術後に食道癌を重複した1症例
9	○勝見　直樹　赤尾　一郎 倉田　文雄　田沢　卓 鈴木　正彦　菊地原基敬	第17回日本頭頸部腫瘍学会		1993. 7.1～3	可逆性シスプラチン皮質盲の1症例
10	○倉田　文雄　赤尾　一郎 菅野　澄雄　鈴木　正彦 田沢　卓　菊地原基敬 竹山　勇　＊小池　満 ＊石田　尚志 （＊第1内科）	第17回日本頭頸部腫瘍学会		1993. 7.1～3	当科における悪性リンパ腫の臨床的検討
11	○菅野　澄雄　＊向井　清 倉田　文雄　竹山　勇 （＊国立がんセンター病理部）	第17回日本頭頸部腫瘍学会		1993. 7.1～3	大唾液腺線癌のPCNA及びc－erbB－2proteinとその予後について
12	○田沢　卓　菊地原基敬 鈴木　正彦　倉田　文雄 竹山　勇	第17回日本頭頸部腫瘍学会		1993. 7.1～3	当科における舌癌の臨床統計的検討
13	○佐久間　惇　加藤　功 高橋　馨子　荻野　貞雄 岩澤　寛　竹山　勇	第25回聖マリアンナ医学会		1993. 7.3	追跡眼球運動における加齢の検討

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
14	○越智健太郎　深水　和子 荻野　貞雄　矢崎　裕久 大橋　　徹　竹山　　勇 ＊蘆田　　浩　＊作山　攜子 （＊放射線科）	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	頸部膿瘍の一治験例 —PERCUFLEX®性ドレナージカテーテル留置法—
15	○岡田　智幸　三保　　仁 南　　定　木下　裕継 赤尾　一郎　釼持　　睦 宮部　　聡　＊高津　忠夫 ＊鈴木　秀明　竹山　　勇 （＊銚子市）	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	インフルエンザ大流行時にみられたマイコプラズマ抗体陽性突発性難聴例の臨床経過
16	○渡辺　昭司　岩澤　　寛 釼持　　睦　木下　裕継 菊地原基敬　＊橋本　久子 坂本　園子　朝倉　美弥 （＊橋本耳鼻咽喉科）	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	当院における内視鏡による鼻内副鼻腔手術症例の検討
17	○岩武　博也　加藤　　功 菅野　澄雄　深水　和子 竹山　　勇	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	輪状軟骨の多発性骨折を呈した1例
18	○赤尾　一郎　加藤　　功 竹山　　勇	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	下方注視麻痺を示した中脳梗塞の1症例
19	○深水　和子　赤尾　一郎 竹山　　勇　＊田所　　衛 （＊第1病理）	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	Sweet病の合併が疑われたMCTDの1症例
20	○中島　博昭	第55回耳鼻咽喉科臨床学会		1993. 7.8～9	耳鼻咽喉科領域の画像診断をめぐって　—どこまで病態の把握が可能か—
21	○中島　久美	第1回神奈川県耳鼻咽喉科・頭頸部外科手術手技研究会		1993. 7.16	当科で最近試みている鼓膜形成術
22	○荻野　貞雄　加藤　　功 高橋　馨子　佐久間　惇 岩澤　　寛　竹山　　勇	第2回耳鼻咽喉科と老化の研究会		1993. 7.23	追跡眼球運動の評価 —Open loop condition—
23	○荻野　貞雄　加藤　　功 佐久間　惇　高橋　馨子 岩澤　　寛　竹山　　勇	第2回後眼振研究会		1993. 7.31～ 8.1	垂直OKN、OKAN
24	○渡辺　昭司　加藤　　功 佐藤　成樹　竹山　　勇	第2回後眼振研究会		1993. 7.31～ 8.1	両側視索核間切除による視運動性眼振へ及ぼす影響
25	○菅野　澄雄　竹山　　勇	第6回日本口腔・咽頭科学会		1993. 9.2～4	口腔・咽頭乾燥症に対するツムラ麦門冬湯の効果
26	○鳥越　達也　三井　雅夫 竹山　　勇　＊田所　　衛 （＊第1病理）	第6回日本口腔・咽頭科学会		1993. 9.2～4	LDH高値を示した両側口蓋扁桃乳頭腫の1症例

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
27	○荻野　貞雄　　加藤　功 佐久間　惇　　高橋　馨子 竹山　勇	第85回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 9.11	垂直OKN・OKANについて
28	○釼持　睦　　渡辺　昭司 木下　裕継　　菊地原基敬	第85回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 9.11	顔面神経麻痺を来したWegener肉芽腫の1症例
29	○上杉　恵介　　中島　博昭 南　定　　竹山　勇 大橋　徹　　釼持　睦 菊地原基敬　　高橋　馨子 堤　康一朗　　佐久間　惇	第32回日本鼻科学会		1993. 9.30～ 10.2	キチン創傷被覆保護材（ベスキチンF）の鼻副鼻腔手術への応用
30	○三保　仁　　上杉　恵介 鳥越　達也　　竹山　勇	第32回日本鼻科学会		1993. 9.30～ 10.2	抗アレルギー剤の内服と局所点鼻との効果検討 予防投与と症状悪化例の治療効果（第2報）
31	○鈴木　毅　　＊設楽　公一 ＊原　太　　＊中島　孝 （＊群馬大病理）	第52回日本癌学総会		1993. 10.5～7	喉頭癌におけるヒトパピローマウイルス（HPV）感染とp53癌抑制遺伝子異変についての検討
32	⊛安本　茂　　＊菊地　慶司 堤　康一朗 （＊神奈川がんセンター）	第52回日本癌学総会		1993. 10.5～7	HPV16－E6／E7効果によるp53タンパクのヒト上皮細胞での動態変化と発癌との関係
33	⊛太田雄治郎　　堤　康一朗 ※安東　春美　　※菊地　慶司 ※岡島　弘幸　　＊荒木　勤 ※安本　茂 （＊日本医大） （※神奈川がんセンター）	第52回日本癌学会総会		1993. 10.5～7	HPV16によるヒト子宮頸癌発生のin vitro, in vivo実験系
34	○堤　康一朗　　＊太田雄治郎 ※安東　春美　　※安本　茂 （＊日本医大） （※神奈川がんセンター）	第52回日本癌学会総会		1993. 10.5～7	ヒト子宮頸部上皮細胞の実験発癌モデル系
35	○吉野　清美　　大橋　徹 木下　裕継　　釼持　睦 赤城　光代　　竹山　勇	第38回日本聴覚医学会		1993. 10.15～16	CAP順応現象の研究
36	○大橋　徹　　吉野　清美 越智健太郎　　竹山　勇 ＊小松崎　篤 （＊東京医科歯科大）	第38回日本聴覚医学会		1993. 10.15～16	聴神経腫瘍手術後の異常蝸電図波形変化
37	○釼持　睦　　木下　裕継 吉野　清美　　大橋　徹 竹山　勇	第38回日本聴覚医学会		1993. 10.15～16	実験的慢性腎不全動物における蝸電図変化
38	○木下　裕継　　釼持　睦 吉野　清美　　大橋　徹	第38回日本聴覚医学会		1993. 10.15～16	5／6腎切除モルモットの騒音負荷時の蝸電図変化

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦 年　次	研　究　題　目
	竹山　勇				
39	○金子　卓爾　南　定 岩武　博也　倉田　文雄 菊地原基敬　竹山　勇 ＊有福　孝徳　＊片山　憲恃 （＊第１外科）	第45回日本気管食道科学会		1993. 10.29～30	遊離空腸による下咽頭・頸部食道の再建
40	○加藤　功	第13回聖マリアンナ医科大学公開講座		1993. 10.30	インフルエンザ・感冒
41	○中島　久美　加藤　功 菅野　澄雄　諸見里和子 高橋　馨子	第３回日本耳科学会		1993. 11.4～6	短期入院による鼓膜形成術の検討
42	○ S. Watanabe I. Kato S. Sato I. Takeyama ＊ M. Norita （＊新潟大）	第23回米国神経科学学会		1993. 11.7～12	MIDDLE LESION IN THE PRETECTUM IN THE MONKEY: EFFECTS ON THE OPTOKINETICS SYSTEM
43	○荻野　貞雄　加藤　功 佐久間　惇　高橋　馨子 竹山　勇	第52回日本平衡神経科学会		1993. 11.25～26	垂直OKN、OKANについて
44	○佐久間　惇　加藤　功 荻野　貞雄　高橋　馨子 岡田　智幸　竹山　勇	第52回日本平衡神経科学会		1993. 11.25～26	Step－Ramp刺激による追跡眼球運動の加齢変化について
45	○岡田　智幸　加藤　功 荻野　貞雄　佐藤　成樹 高橋　馨子　佐久間　惇 中島　博昭　竹山　勇	第52回日本平衡神経科学会		1993. 11.25～26	Open loop condition での追跡眼球運動の評価が有用であったWallenberg症候群症例
46	○渡辺　昭司　加藤　功 佐藤　成樹　岡田　智幸 竹山　勇	第52回日本平衡神経科学会		1993. 11.25～26	脳幹内における橋被蓋網様体からの投射
47	○赤尾　一郎　加藤　功 竹山　勇	第52回日本平衡神経科学会		1993. 11.25～26	中脳病変における垂直軸の眼球運動障害
48	○南　定　加藤　功 上杉　恵介　菅野　澄雄 勝見　直樹　竹山　勇	第86回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 11.27	外傷性外リンパ瘻の一症例
49	○勝見　直樹　上杉　恵介 南　定　菅野　澄雄 竹山　勇　＊風間　暁男 ＊高桑　俊文 （第２病理）	第86回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1993. 11.27	頸部Castleman lymphomaの一例
50	○南　定　加藤　功 上杉　恵介　菅野　澄雄 勝見　直樹　竹山　勇	第26回聖マリアンナ医学会		1993. 12.4	外傷性外リンパ瘻の一症例

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
51	○岩武　博也　竹山　勇 鈴木　毅　赤尾　一郎 菅野　澄雄　堤　康一朗	第37回日本耳鼻咽喉科学会新潟県地方部会		1993. 12. 5	ヒトパピローマウイルス(HPV)16型遺伝子を導入したヒト喉頭上皮細胞の性質
52	○赤尾　一郎　竹山　勇 鈴木　毅　岩武　博也 菅野　澄雄　堤　康一朗	第37回日本耳鼻咽喉科学会新潟県地方部会		1993. 12. 5	ヒトパピローマウイルス(HPV)16型陽性喉頭癌症例における癌抑制遺伝子の状態と発現性
53	○Ogino. S Kato. I Takahashi. K Sakuma. A Takeyama. I ＊Nakamura. T ＊Kanayama. R （＊山形大）	INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON VESTIBULAR DISORDERS		1994. 1. 21～22	Eye movements Patients witn Wallenberg's syndrome
54	○Watanabe. s Kato. I Takahashi. K Takeyama. I	INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON VESTIBULAR DISORDERS		1994. 1. 21～22	Indications and results of Gentamicin injection into The Middle Ear of Menieres Disease
55	○上杉　恵介　南　定 菅野　澄雄　竹山　勇 ＊風間　暁男　＊高桑　俊文 （＊第２病理）	第４回日本頭頸部外科学会		1994. 1. 28～29	頸部Castleman lymphomaの一例
56	○南　定　菊地原基敬 上杉　恵介　中島　博昭 竹山　勇　＊田口　芳雄 ※熊谷　憲夫　△風間　暁男 （＊第２外科） （※形成外科） （△第２病理）	第４回日本頭頸部外科学会		1994. 1. 28～29	鼻翼部原発悪性神経鞘腫の１例
57	○朝倉　美弥　中島　久美 南　定　勝見　直樹 加藤　功　竹山　勇 ＊大貫　忠男　高橋　馨子 （＊第１内科）	第87回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1994. 3. 5	血小板凝集能からみためまい症突発性難聴、顔面神経麻痺について
58	○金子　卓爾　上杉　恵介 南　定　菅野　澄雄 赤尾　一郎　岩武　博也 竹山　勇　＊高桑　俊文 （＊病理学）	第87回日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会		1994. 3. 5	上咽頭癌に頸部リンパ節結核を合併した２症例
59	○岩武　博也　堤　康一朗 鈴木　毅　赤尾　一郎 菅野　澄雄　竹山　勇	第６回日本喉頭科学会		1994. 3. 11～12	ヒトパピローマウイルス(HPV) 16型遺伝子を導入した喉頭上皮細胞の性質
60	○堤　康一朗　竹山　勇 鈴木　毅　岩武　博也 菅野　澄雄　赤尾　一郎	第６回日本喉頭科学会		1994. 3. 11～12	ヒトパピローマウイルス(HPV) 16型陽性喉頭癌症例における癌抑制遺伝子の状態と発現性

番号	氏　　名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年　次	研　究　題　目
61	○漆畑　保　岩武　博也 堤　康一朗　赤尾　一郎 飯田　順　竹山　勇	第6回日本喉頭科学会		1994. 3.11～12	ヒト喉頭上皮におけるアンドロジェン受容体の検討
62	○菅野　澄雄　岩武　博也 南　定　中島　久美 星川　智英　竹山　勇 ＊柿本　伸一 （＊病理学）	第6回日本喉頭科学会		1994. 3.11～12	声帯神経鞘腫の1症例

外来担当表（平成７年１月現在）

		月	火	水	木	金	土
午前	初診①	加藤 （新谷） 岡田	岩武	竹山 （萎澤） 吉野	高橋	堤	上杉
	初診②	南	鈴木	佐久間	鈴木	釼持	三保
	再来	吉野 堤	高橋 杉浦 新谷	岡田 南 三保	上杉 釼持	岩武 関	佐久間 杉浦 萎澤
	再来 検討				竹山 （関）		
	特殊 外来				喉頭	めまい	
					*岩武 南 新谷 菅野 （飯田） （星川）	加藤 岡田 佐久間 萎澤 （高橋馨）	堤 田沢 鈴木 関
	病棟番	萎澤	関	関	萎澤	新谷	新谷

午後	特殊	聴覚耳鳴 顔面神経	内視鏡	アレルギー 扁桃	蝸電図	
		高橋 吉野 岡田 杉浦 *赤城	岩武	上杉 三保 *鳥越 *三井 *宮部	吉野 *釼持 *大橋	
	めまい検	萎澤	新谷	関		
	救急番	新谷	関	萎澤	三保	釼持

医局構成員住所録

氏名	住所	電話
〈主任教授〉		
竹山 勇	〒194 東京都町田市つくし野二－一〇－三二	○四二七（九六）五四一三
〈教授〉		
加藤 功	〒213 川崎市高津区溝ノ口七一－三	○四四（八一四）二三一七
大橋 徹	〒154 東京都世田谷区野沢三－二－八 東豊エステート一二〇二号	○三（三四一〇）二六五二
	〒305 茨城県つくば市大角豆九四九－一〇	○二九八（五一）一七四一
〈客員教授〉		
猪初 男	〒152 東京都目黒区大岡山二－四－三	○三（三七一七）四二一二
〈助教授〉		
高橋 姿	〒214 川崎市多摩区南生田七－七－一～二三六 南生田アメニティーホームズ	○四四（九三二）九七七六

氏名	住所	電話
〈講師〉		
漆畑 保	〒194 東京都町田市原町田二－一九－一三	○四二七（二四）五四〇二
中島博昭	〒213 川崎市高津区末長四六－一 梶が谷プラザビル一〇〇九号	○四四（八七七）四〇一九
堤 康一朗	〒164 東京都中野区本町二－四二－一五	○三（三三七二）二一一〇
上杉恵介	〒215 川崎市麻生区王禅寺二三七五－三六	○四四（九六六）二六四二
佐藤成樹	〒224 横浜市都筑区中川四－一四－三三 リーベンランデG－一〇二号	○四五（九一三）一一九七
〈助手〉		
吉野清美	〒225 横浜市青葉区美しが丘五－一八－二 コーポ山中第一－三〇一号	○四五（九〇一）六八七五

坂本園子
〒211 川崎市幸区南加瀬三－二五－一
〇四四（五八八）三三三五

〒305 茨城県つくば市吾妻二－八〇五－一二〇六
〇二九八（五六）〇四七三

岩武博也
〒225 横浜市青葉区美しが丘西二－五四－一二
プラザ美しが丘二〇二
〇四五（九〇一）三三八六

越智健太郎
〈留学先〉Department of Psychology University of Calgary 2500 University Drive N. W., Calgary, Alberta, Canada T2N 1N4
〈住所〉1540－29 Street, N. W., Suite # 1004, Calgary, Alberta, Canada T2N 4M1
403（220）5561
FAX403（282）8249
〈留守中連絡先〉
〒167 東京都杉並区下井草二－一六－一四
〇三（三三九〇）八六九八

大川勇
〒125 東京都葛飾区南水元二－七－二四
〇三（三六〇八）一二〇二

岡田智幸
〒215 川崎市麻生区百合丘二－一八－一
ラ・フォーレ百合丘三〇二
〇四四（九五三）八二二五

南定
〒225 横浜市青葉区荏子田二－三六－二二
プラザオノベ一〇三号
〇四五（九〇三）五五四九

〒151 東京都渋谷区幡ケ谷二－一八－一六
〇三（三三七六）二五五四

佐久間惇
〒225 横浜市青葉区荏田町一三〇七
エクセル江田四〇五
〇四五（九一三）〇九八五

赤尾一郎
〒225 横浜市青葉区荏田町三二三－二
グレンハイツあざみ野三〇五号
〇四五（九一二）一六五三

芋川英紀
〒158 東京都世田谷区玉川台二－四－八
ベルメゾン用賀一〇一
〇三（三七〇八）五七八六

荻野貞雄
〒288 銚子市松本町一－九八七
メゾン太田屋三〇三
〇四七九（二二）九八六四

木下裕継
〒194 東京都町田市つくし野四－九－三
〇四二七（九九）五六七六

菅野澄雄
〒214 川崎市多摩区中野島六－二九－五－三一一
○四四（九四五）三五二七

田沢卓
〒225 横浜市青葉区新石川四－二七－一六
アルカディア飯島二〇二号
○四五（九一一）四八五八

鳥越達也
〒213 川崎市高津区末長四五－一
秋本ビル六〇一号
○四四（八六一）六三一七

渡辺昭司
〒214 川崎市多摩区登戸二二五六
三島園マンション四〇五号
○四四（九三三）八五四一

赤城光代
〒225 横浜市青葉区あざみ野四－一六－二
テラスボナールA号
○四五（九〇二）七〇五九

木原紀子
〒213 川崎市高津区下作延三七八－三
コスモ梶が谷六〇八
○四四（八五二）一七八一

剱持睦
〒227 横浜市青葉区奈良町二八六四－三
モアクレスト玉川学園壱番館四〇三号
○四五（九六一）○四三五

矢崎裕久
〒201 東京都狛江市元和泉一－五－五
元和泉ハイツ二〇二号
○三（三四八〇）五三一六

三井雅夫
〒216 川崎市宮前区潮見台八－二八
潮見台ハイツ一〇二号
○四四（九七五）○八八一

〈病院助手〉

朝倉美弥
〒242 大和市下鶴間二五七〇－一
ダイヤパレス鶴間八〇三号
○四六二（七七）二五八九

三保仁
〒222 横浜市港北区師岡町三五六
○四五（五三一）一五三七

小松崎靖
〒220 横浜市西区老松町二九－一
野毛山マンション三D
○四五（二三一）四四六三

〒104 東京都中央区築地五－一－一
国立がんセンターレジデント宿舎五三一号
○三（三五四二）二五一一
P・B・三六八

勝見直樹
〒216 川崎市宮前区小台一－四－七
カサベルデ宮前平四〇五号
○四四（八五六）七八六七

宮部　聡
〒288　千葉県銚子市明神町一－一六九－一－一〇三
〇四七九（二五）三三八一

諸見里和子
〒225　横浜市青葉区黒須田三二－一二
ファミーユあざみ野四〇一
〇四五（九七四）三〇六六

杉浦夏樹
〒214　川崎市多摩区桝形六－九－一
エクメーネ三〇一号
〇四四（九一一）七八〇三

〈大学院生〉

鈴木　毅
〒215　川崎市麻生区上麻生一三五五
〇四四（九八六）九二九一
〇四四（九八八）二一三〇

金子卓爾
〒156　東京都世田谷区桜丘三－二八－二一
〇三（三四二〇）二〇六八
〇三（三四二七）四二三一

〈研修医〉

萎澤えり子
〒216　川崎市宮前区宮崎二－二－二四
ノーブルパレス三〇七
〇四四（八五二）一八〇七

新谷敏晴
〒150　東京都渋谷区松濤一－二九－一二
〇三（三四六二）二五二八

関　良武
〒215　川崎市麻生区百合丘一－三－五－二〇三号
〇四四（九六五）一八六九

菊池　仁
〒225　横浜市青葉区あざみ野二－一六－一四
〇四五（九〇一）六四三五

〈研究員〉

山田善一
〒963　福島県郡山市中町一四－一七
〈中町クリニック〉　〇二四九（三九）三三八七

曽我敏恵
〒230　横浜市鶴見区下野谷町四－一七九
〇四五（五一一）〇三一六

星川智英
〒223　横浜市港北区新吉田町一一四九－二
〇四五（五三一）二二八五
〒223　横浜市港北区富士塚一－一－九
有馬メディカビル二〇二号
〈星川耳鼻咽喉科〉　〇四五（四三五）一二八七

平沼一良
〒225　横浜市青葉区美しが丘西三－一三－九
〇四五（九〇一）五〇〇一
〒216　川崎市宮前区平一－四－一六
〈平沼歯科クリニック〉　〇四四（八六六）六〇〇六

小松崎　貴　美
〒220　横浜市西区老松町二九－一
野毛山マンション三D
〇四五（二二三一）四四六三

〈医療技術員〉

久保田　成　美
〒210　川崎市幸区小向西町三－三〇
〇四四（五四四）二〇九二

山崎　圭　子
〒257　秦野市曽屋四〇七九
〇四六三（八一）二八一九

久保田　恵　子
〒201　東京都狛江市岩戸北四－二－八
ハイツ・サンフラワー二一一号
〇三（五四九七）三三四九

岡本　直　子
〒233　横浜市港南区日野四－二八－一一
〇四五（八四三）七八六八

畠山　ひろみ
〒214　川崎市多摩区生田六－一三－九
〇四四（九五三）一三六三

〈秘　書〉

西村　典　子
（飯田）〒216　川崎市宮前区神木本町二－一九－六
フルール三神三番館三〇三
〇四四（八七七）八五七三

長谷川　桂　子
〒151　東京都渋谷区代々木三－一九－三－二〇一
〇三（三三七五）九二一二

〈非常勤講師〉

飯田　順
〒215　川崎市麻生区片平二－二四－一六－六〇八
〇四四（九八六）三四六〇
〒228　座間市相武台一－四五〇七
第六広栄ビル二F
〈飯田耳鼻咽喉科医院〉〇四六二（五七）九〇〇一

五十嵐　淑　晴
〒142　東京都品川区二葉三－三－一〇（自宅）
〈五十嵐耳鼻咽喉科医院〉
〇三（三七八七）一二〇六

石倉　幹　雄
〒145　東京都大田区北千束一－九－一七
〇三（三七一七）三四九七
〒110　東京都台東区根岸三－一一－八
〈石倉耳鼻咽喉科医院〉〇三（三八七二）〇六六八

巌　文雄
〒158　東京都世田谷区玉川台一－一－一五
用賀アンクレ二〇五号
〇三（五七一六）三六三三
〒213　川崎市高津区末長一四六－一
姿見台スカイハイツA－一〇三号
〈梶が谷耳鼻咽喉科〉〇四四（八七七）四六二八

大竹英夫
〒194-01 東京都町田市三輪緑山一-七-一一
〇四四（九八七）六七〇五
〒177 東京都練馬区関町北二-二六-一八
〇三（三九二九）八七三三
〈大竹耳鼻咽喉科〉

小野泰三郎
〒190 東京都立川市若葉町一-一六-六
〇四二五（三七）三五〇六
〒190 東京都立川市若葉町一-一四-二八
〇四二五（三六）〇二四〇
〈けやき台耳鼻咽喉科〉

菊地原基敬
〒215 川崎市麻生区王禅寺五〇七-一七三
〇四四（九八八）九八二五
〒215 川崎市麻生区千代が丘八-一-三-一〇三
〇四四（九五一）六八二一
〈菊地原耳鼻咽喉科〉

瀬戸院一
〒230 横浜市鶴見区東寺尾中台二〇-三
〇四五（五八二）五六一七
〒230 横浜市鶴見区鶴見二-一-三
〇四五（五八一）一〇〇一
〈鶴見大学歯学部　第一口腔外科〉

高橋馨子
〒225 横浜市青葉区市ケ尾四九五-七
〇四五（九七二）一一六四

羽馬晃
〒221 横浜市港北区師岡町南谷戸三四三-二
〇四五（五三一）七九八一
〒226 横浜市緑区鴨居一-一〇-九
ビンテンビル一F
〈鴨居耳鼻咽喉科医院〉〇四五（九三三）七六七二
〒194 東京都町田市旭町二-一五-四一
〇四二七（二二二）二二三〇
〈町田市民病院　耳鼻咽喉科〉

吉川由繪
〒336 埼玉県浦和市常盤七-九-一六
〇四八（八三三）〇八七一
〒332 埼玉県川口市西川口一-六-一
小野田ビル三F
〇四八（二五四）〇八七一
〈吉川耳鼻咽喉科医院〉

渡来潤次
〒181 東京都三鷹市上連雀二-四-一三
〇四二二（四七）九〇七七
〒300-12 茨城県牛久市刈谷町二-一七六-二
〇二九八-七四-六八八七
〈渡来耳鼻咽喉科医院〉

関連病院住所録

稲城市立病院
和田孝雄病院長
〒192－02 東京都稲城市大丸一一七一
〇四二三（七七）〇九三一

稲田登戸病院
水川晴夫病院長
〒214 川崎市多摩区桝形六－一－一
〇四四（九一一）二一〇〇

大船中央病院
桝岡勇雄病院長
〒247 鎌倉市大船六－二－二四
〇四六七（四五）二一一一

京浜総合病院
福田昌且病院長
〒211 川崎市中原区新城一－二－五
〇四四（七七七）三二五一

国立がんセンター
末盛恵一総長
〒104 東京都中央区築地五－一－一
〇三（三五四二）二五一一

済生会川口総合病院
大西義久病院長
〒332 埼玉県川口市西川口五－一二－一
〇四八二（五三）一五五〇～三

左近山診療所
福村正診療所長
〒241 横浜市旭区左近山団地一－三五－一〇二
〇四五（三五二）四一八四

聖マリアンナ医科大学東横病院
東威病院長
〒211 川崎市中原区小杉町三－四三五
〇四四（七二二）二一二一

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院
岡部和彦病院長
〒241 横浜市旭区矢指町一一九七－一
〇四五（三六六）一一一一

積仁会島田総合病院
嶋田賢病院長
〒288 千葉県銚子市東町五－三
〇四七九（二二）五四〇一

茅ケ崎徳州会総合病院
福島安義病院長
〒253 茅ケ崎市幸町一四－一
〇四六七（八五）一一二二

東芝林間病院
大庭浩病院長
〒228 相模原市上鶴間七－九－一
〇四二七（四二）三五七七

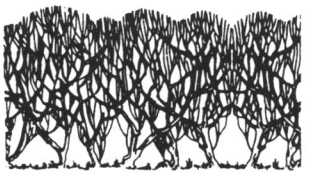
藤田病院
杉浦昭義病院長
〒154 東京都大田区田園調布二－三四－二二
〇三（三七二一）二八三二

町田市民病院
貴島政邑病院長
〒194 東京都町田市旭町二－一五－四一
〇四二七（二二二）二二三〇

松沢病院
金子嗣郎病院長
〒156 東京都世田谷区上北沢二－一－一
〇三（三三〇三）七二一一

向ケ丘診療所
新井健之診療所長
〒216 川崎市宮前区平二－六－一
〇四四（八六六）六三二〇

横浜総合病院
吉永信裕病院所長
〒225 横浜市緑区鉄町二二〇一
〇四五（九〇二）〇〇〇一



編集後記

世界で一番忙しいといわれるのがアメリカ大統領、もっと忙しいワーカホリックな代表的日本人であるソニー会長盛田昭夫氏が引退されました。一代で「世界のソニー」にまで自社を発展させ、自らも文筆・講演活動を行って、持論を展開し、文字通り、わが国の高度経済成長を支えてきたことは、周知のところであります。理論ばかりで実践が伴わないウォーキング・ディクショナリー（生き字引）の風潮のなか、理論と実践を伴う理想的リーダーが第一線を退くことは、健康のことはいえ、誠に残念であります。このことはいくら有能であっても、限界があるということ、それは時間的制約であるということを教えてくれました。

わが聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科学教室　二代目主任教授である竹山　勇先生が退官されることは、盛田氏とは分野のちがいこそあれ、残念なことではありますが、次期主任教授である加藤　功先生のご指導の下、わが教室が更に盛り立てられ、世界レベルにならんことを、教室員一同願ってやみません。

（文責：岡田智幸）

同門会誌第四号

発　行　聖マリアンナ医科大学
　　耳鼻咽喉科学教室
印　刷　（有）高野企画印刷社
平成七年三月